熊本県文化財整備報告第２集

横　山　古　墳

1994

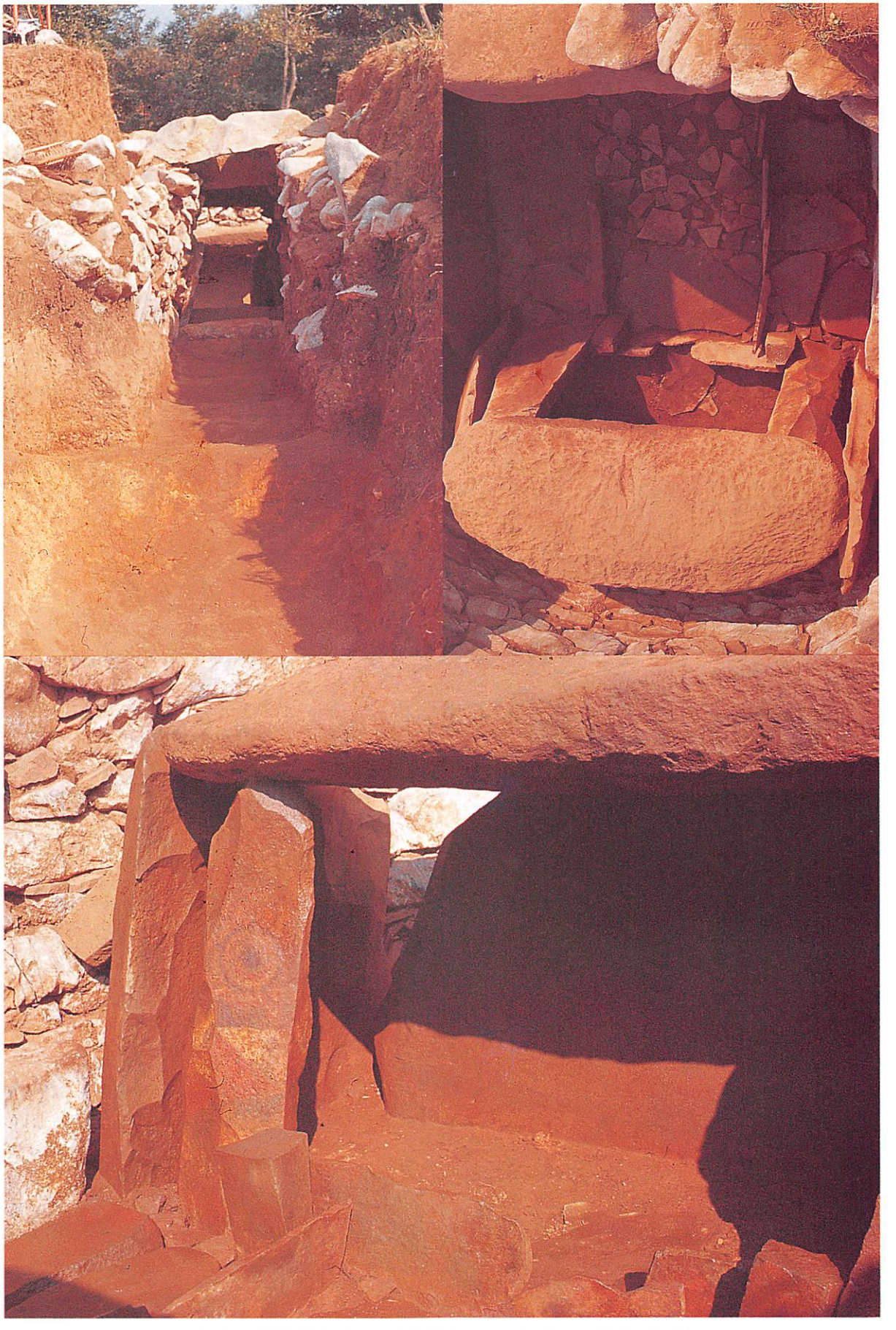
熊本県教育委員会

横山古墳復原整備報告書

1994

熊本県教育委員会

横山古墳復原全景



左上　発掘調査時の羨道部　　右上　石室上面観

下　石屋形全景

序　文

熊本県北部に位置する菊池川流域には、多くの古代遺跡が分布しており、特に装飾古墳の宝庫として有名です。

そこでこの地の自然と歴史的風土を保存し、かつ文化財の普及活用を図るため本県では、同流域の山鹿市、鹿央町、菊水町の３地区で「肥後古代の森（風土記の丘）」整備事業を昭和58年度から進めてきました。

鹿央地区には、築造当時の墳丘をほぼ完全な姿で残し県内最大規模の双子塚古墳をはじめ、装飾を持つ横穴墓など多くの史跡が所在し、これらの史跡整備が、肥後古代の森（鹿央地区）の中心となるものです。

横山古墳は、石屋形袖石に同心円文、双脚輪状文、三角文などが描かれた貴重な装飾古墳であり、鹿央地区に隣接する鹿本郡植木町に所在していたものですが、九州縦貫自動車道の建設予定地にあったため、昭和44年に発掘調査を行い石室石材を解体、保存してきたものです。

このたび肥後古代の森整備事業の一環として鹿央地区の県立装飾古墳館隣接地に移築復原し、併せて見学施設を設け、文化財の普及活用を図ることとしております。

事業を進めるにあたっては、東京国立文化財研究所、地元鹿央町をはじめ関係各位の多大な御指導、御協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

本報告書を刊行するにあたり、横山古墳が多くの県民に親しまれるとともに、今後の史跡整備の参考として活用されることを願ってやみません。

平成６年３月31日

熊本県教育長　　道越　　温

例　言

1．本書は、横山古墳の墳丘及び石室復原整備事業の報告書である。
2．編集にあたっては、本工事の基本設計図書、実施設計図書のほか発掘調査資料及びその他関連する文献を参考とした。
3．図については、発掘調査時の実測図及び本工事設計図・施工図を掲載した。
4．写真は、発掘調査及び本工事における工事中及び竣工後の主要なものを掲載した。
5．本書の作成及び編集は、株式会社空間文化開発機構の協力を得て熊本県教育委員会文化課が行った。
6．本事業及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大な御指導・御助言並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略、順不同）

文化庁文化財保護部記念物課
三輪　嘉六（東京国立文化財研究所）
甲元　真之（熊本大学文学部）
鹿央町教育委員会

本文目次

第１章　横山古墳の概要 …… 1
（１）横山古墳をとりまく環境 …… 1
①肥後古代の森 …… 1
②歴史的環境 …… 2
（２）横山古墳の概要 …… 4
①名称及び所在地 …… 4
②遺構の概要 …… 5
第２章　復原整備事業の概要 …… 7
（１）事業の目的 …… 7
（２）事業の経緯 …… 7
（３）移築復原地の概要 …… 7
（４）事業の内容 …… 7
（５）事業体制 …… 8
（６）事業費 …… 9
（７）工程 …… 9
第３章　復原整備計画 …… 10
（１）計画の理念 …… 10
（２）復原整備方針 …… 10
①復原整備方針 …… 10
②周辺施設整備方針 …… 11
③修景整備方針 …… 11
（３）計画概要 …… 12
①造成計画 …… 12
②雨水排水計画 …… 12
③遺構整備計画 …… 12
④周辺施設整備計画 …… 13
第４章　施工 …… 14
（１）石室復原工事 …… 14
（２）覆屋建築工事 …… 17
①建築工事 …… 17
②電気設備工事 …… 22
③空調設備工事 …… 23
（３）墳丘復原工事 …… 24
（４）周辺整備工事 …… 25
①園路工事 …… 25
②学習施設工事 …… 25
③安全施設工事 …… 28
④休養施設工事 …… 28
⑤雨水排水設備工事 …… 29
⑥植栽工事 …… 30
総括（まとめ） …… 31

挿　図　目　次

第１図　肥後古代の森（鹿央地区）平面図 …… 1
第２図　装飾古墳分布図（横山古墳位置図） …… 3
第３図　移築前の横山古墳測量図 …… 4
第４図　移築前の石室展開図…… 6
第５図　石材裏込強化断面図…… 16
第６図　覆屋平面図 …… 18
第７図　覆屋断面図 …… 19
第８図　覆屋断面詳細図 …… 20
第９図　覆屋電気設備系統図…… 22
第10図　覆屋空調設備系統図…… 23
第11図　墳丘表層断面図 …… 24
第12図　解説板詳細図 …… 25
第13図　ベンチ詳細図 …… 28
第14図　縁台詳細図 …… 28
第15図　排水平面図 …… 29
第16図　植栽平面図 …… 30
第17図　横山古墳整備平面図…… 31

表　目　次

表１　肥後古代の森（鹿央地区）文化財等概要 … 2
表２　事業費一覧表 …… 9
表３　事業工程表 …… 9
表４　真砂土モルタル配合表…… 15
表５　植栽数量表 …… 30

写　真　目　次

1　石室復原工事状況 …… 34
2　石室復原工事状況
　　（裏込は真砂土モルタル） …… 34
3　２m以上積み上がった石室状況 …… 34
4　復原図を見ながら石材を修正状況 …… 35
5　巨石はクレーンで上部から搬入状況 …… 35
6～7　羨道部天井石を据え付け状況 …… 36
8　解体石材の清掃 …… 36
9　浸漬法での強化剤含浸…… 36
10　スプレー法での強化剤含浸…… 37
11　覆屋型枠作業完了 …… 37
12　覆屋躯体全景 …… 37
13　覆屋天井PC　コンクリート据付 …… 38
14　覆屋外部防水工事 …… 38
15～16　真砂土モルタル施工状況 …… 39
17　復原された石屋形 …… 39
18　復原された石屋形 …… 39
19　墳丘盛土開始 …… 40
20　墳丘盛土状況 …… 40
21　墳丘の形態完了 …… 40

第１章　横山古墳の概要

（１）横山古墳をとりまく環境

①肥後古代の森

熊本県北部の菊池川流域には、全国一を誇る装飾古墳群、銘文太刀を始めとし多数の国宝を出土した江田船山古墳、築造当時の墳丘をほぼ完全な姿で残し県内最大規模の前方後円墳である双子塚古墳等、わが国の古代文化を理解するうえで極めて重要な遺跡が数多く分布している。

このようなことから熊本県では、文化庁が進めていた「風土記の丘」を菊池川流域で整備することとし、同流域の山鹿市、鹿央町、菊水町の３地区で約70ヘクタールの用地を選定し、昭和58年度から整備事業に着手した。

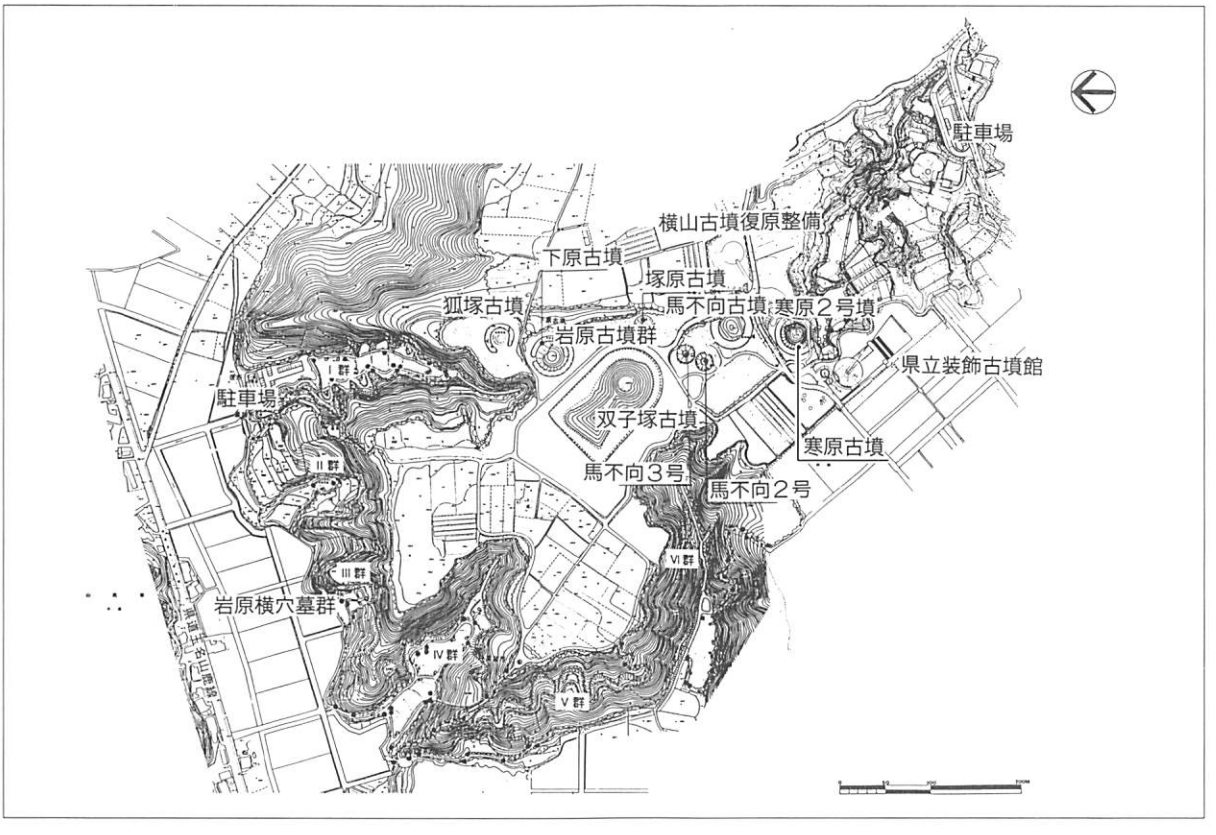
各地区に分布する古墳群については、発掘調査等に基づき築造当時の姿に修復整備するとともに、特に装飾古墳については、普及活用を図るため内部見学を可能とする各種の施設・設備を整備した。さらに、文化財の周辺地域では熊本県の古代文化を理解する一助として各種の環境整備事業も実施している。

古墳時代後期ごろ墳丘上に立てたもので、「石人・石馬」と総称される各種の石製品を展示解説した「石人の丘」、レリーフ系装飾文様が描かれた横穴墓の一部を複製し一堂に展示解説した「古代の森」、そして現在整備中であるが縄文時代及び当時の人々の生活の様子が散策しながら体験できる「縄文のむら」がその主なものである。

平成４年４月には、３地区の中核施設となる県立装飾古墳館が鹿央地区にオープンしたが、その際整備事業名を「肥後古代の森」として正式決定した。

鹿央地区に移築復原した横山古墳は、石屋形袖石等に同心円文、双脚輪状文、三角文等の幾何学文様が描かれた貴重な装飾古墳であり、肥後古代の森整備事業の一環として昭和44年の発掘調査以来、20数年の歳月を経て復原したものである。

第１図　　肥後古代の森（鹿央地区）平面図



横山古墳の移築復原地周辺には下記に示すような数多くの古墳や関連施設が分布する。

肥後古代の森（鹿央地区）文化財等概要　　表１

名　称		概　要
岩原古墳（国指定史跡）		菊池川流域では最大の古墳群。 前方後円墳の双子塚古墳を中心に円墳群が並び、地元では「四十八塚」とも呼んでいる。５世紀ごろ菊池川中流域を支配した豪族の墳墓。円墳は下原古墳、馬不向古墳、寒原古墳、寒原２号墳、狐塚古墳、馬不向２・３号墳、塚原古墳からなる。主な古墳の概要は以下に示すとおりである。
	双子塚古墳	全長126m、墳長107m、後円部高さ9.3mの前方後円墳。 ３段築成、墳丘斜面は葺石を敷きつめ、円筒埴輪が並べられている。
	寒原古墳	直径約27m、高さ4.2mの円墳。墳丘斜面には葺石がある。幅約７mの周溝が巡る。 家形石棺をもつ。
	寒原２号墳	農道工事に際して発見された。一辺約10mの三角形に残る円墳。葺石をもつ。 内部主体の短石は凝灰岩の一枚石、側壁は凝灰岩と結晶片岩の小口積みで、家形の蓋石をもつ。
	馬不向古墳	直径約27m、高さ５m、周囲に幅約７mの周溝がある。葺石をもつ。
	下原古墳	直径約31m、周囲に幅約８mの周溝がある。葺石をもつ。北側に陸橋が確認されている。
	狐塚古墳	直径約18m、周囲に幅約６mの周溝がある。西側に陸橋をもつ。横穴式石室。
岩原横穴墓（県指定史跡）		岩原台地の北側と西側の崖面に所在する131基の横穴群。 その分布状況から６群に分けられる。これらの中には多くの装飾をもつ横穴墓の他、舳先の上がったゴンドラ形の屍床をもつもの（第１群14号）や、靫が浮彫されたもの（第１群31号・32号）など特色ある横穴墓が見られる。
熊本県立装飾古墳館		山鹿市、鹿央町、菊水町の３地区からなる「肥後古代の森」の中核施設。 日本を代表する装飾古墳分布地である熊本県の代表的な装飾古墳のレプリカを展示した装飾古墳室や菊池川流域を中心に原始・歴史時代の遺物を展示している。常設展示室、企画展示室、体験学習室、イマジネーションホール、野外展示場などからなる。 建築面積：1,448.83㎡、構造：鉄骨鉄筋コンクリート、地上１階地下１階、延床面積：2,098.98㎡

②歴史的環境

横山古墳はかつて熊本県北部の菊池川流域の鹿本郡植木町に所在していた。この菊池川流域は、古くから肥沃な平野や河岸段丘が形成され、早くから人々が生活していたと思われ、旧石器時代の遺跡の分布も見られる。以降、縄文、弥生、古墳時代と人々の生活の場であり続けたことが流域に残る多くの遺跡等により確認されている。

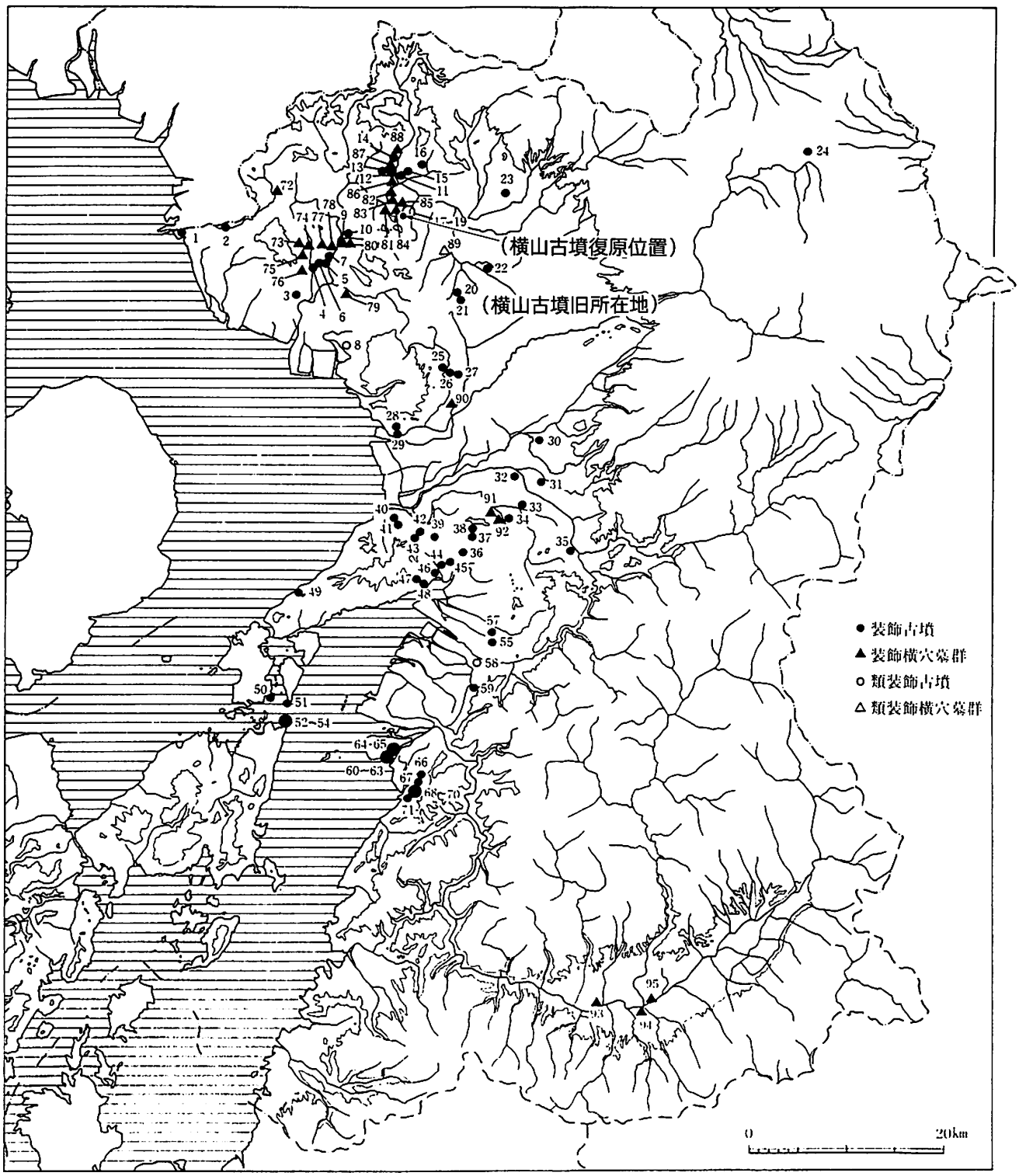
しかし、最もこの地域を特色づけているのは古墳時代の遺跡であり、九州の古墳文化を代表するといわれる装飾古墳が数多く分布している。

全国の装飾古墳は、確認されているもので、約480基余を数える。その中の約40%に当たる186基が熊本県に存在し、さらにその半数以上が菊池川流域に分布しており、その密度は日本一である。

以上のように横山古墳の旧所在地周辺には数多くの歴史的、文化的遺産が分布し、豊かな歴史的環境を有しているといえる。

今回、本事業において横山古墳はかつての所在地に近い鹿本郡鹿央町の肥後古代の森（鹿央地区）の一角に移築復原されることになったが、この地区もかつての横山古墳の所在地と同様、豊かな歴史的環境を有しており、その歴史的環境は移築復原の適地であるといえる。

第２図　　装飾古墳分布図　（横山古墳位置図）



1四ツ山　2三ノ宮　3大原９号　4大坊　5永安寺東　6永安寺西　7馬出　8経塚　9塚坊主　10江田穴観音　11臼塚 12チブサン　13オブサン　14馬塚　15弁慶ガ穴　16御霊塚　17持松塚原　18持松３号　19浦大間４号　**20横山**　21石川山４号　22石立　23袈裟尾高塚　24上御倉　25釜尾　26富尾　27稲荷山　28千金甲１号　29千金甲２号　30井寺　31今城大塚　32坂本　33甚九郎山　34石之室　35中郡　36宇賀岳　37潤野　38晩免　39宇土城石垣の古墳石材　40梅崎　41城塚　42東畑　43仮又　44鴨籠 45不知火塚原１号　46国越　47桂原１号　48桂原２号　49小田良　50長砂連　51広浦　52大戸鼻北　53大戸鼻南　54大戸鼻 55大野窟　56大野（位置不明）　57竜北高塚　58大王山　59門前２号　60大鼠蔵尾張宮　61大鼠蔵東麓１号　62大鼠蔵東北麓２号　63大鼠蔵西北麓２号　64小鼠蔵１号　65小鼠蔵３号　66五反田　67長迫　68 田川内１号　69田川内２号　70田川内３号　71竹ノ内　72今村岩の下　73石貫穴観音　74石貫ナギノ　75石貫古城　76原　77横畠　78城迫間　79田崎　80長力・北原　81小原浦田　82小原大塚　83長岩　**84岩原**　85桜ノ上　86鍋田　87付城　88城　89宮穴　90古城　91御領　92牛頸　93大村　94京ガ峰　95小原

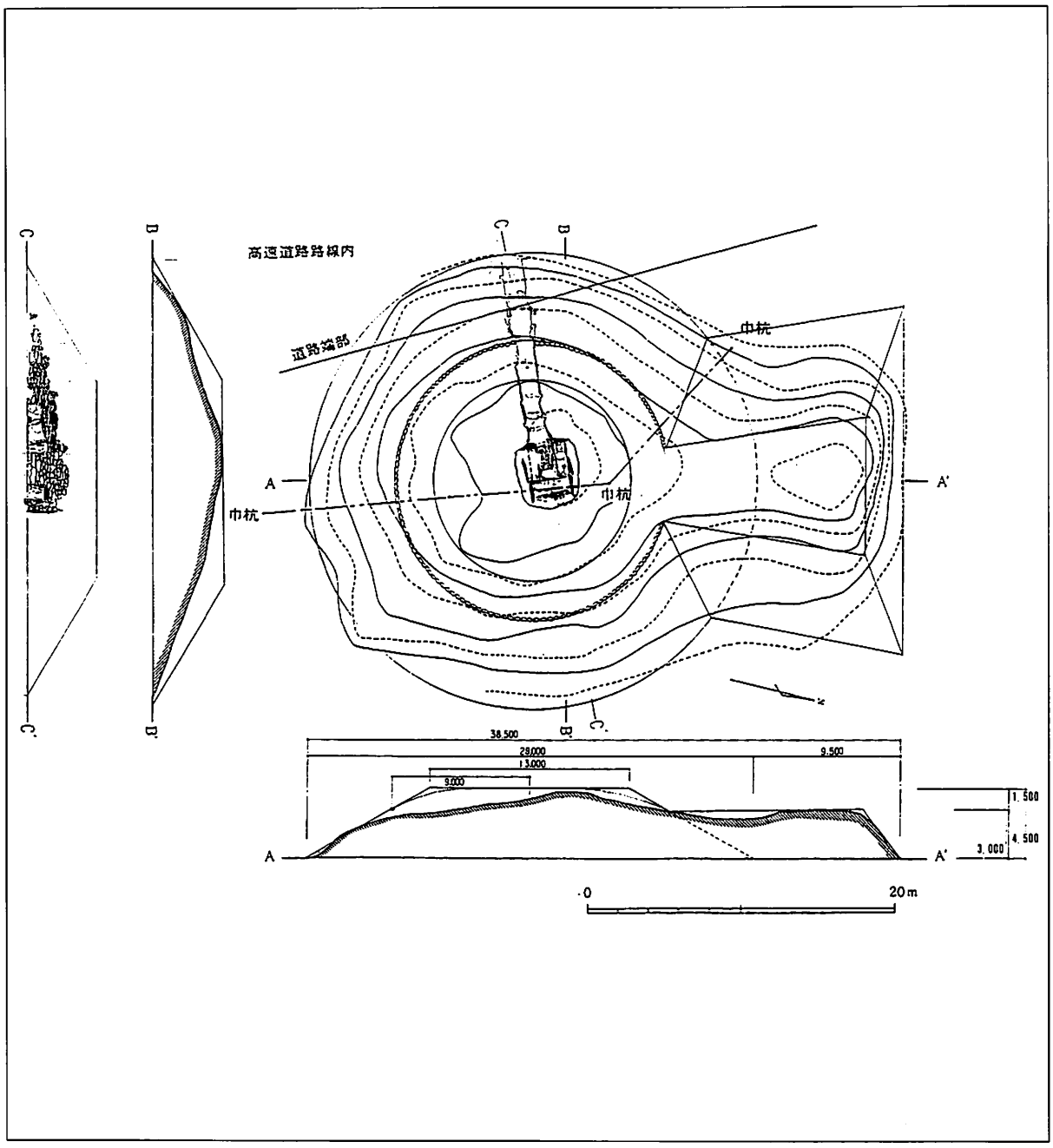
（２）横山古墳の概要

①名称及び所在地

名　　称：横山古墳
旧 所 在 地：熊本県鹿本郡植木町有泉字横山地内
移築復原地：熊本県鹿本郡鹿央町岩原字塚原3186番1
復原地面積：3,688㎡

横山古墳は、かつて熊本県鹿本郡植木町の南東部の横山地区の小丘陵に所在した古墳であるが、九州縦貫自動車道の建設予定地にあったため、発掘調査後、石室部分は解体され保存されてきたが、肥後古代の森整備事業の一環として鹿央地区の県立装飾古墳館隣接地に移築復原した。

第３図　　移築前の横山古墳測量図



②遺構の概要

発掘調査（昭和44年）等により明らかとなった古墳の概要は次のとおりである。

〈墳丘〉

前方後円墳

全長　39.5m

後円部直径　29m　前方部幅　　19m

後円部高さ　５m　前方部高さ　３m

築造にあたっては、山の自然の起伏を利用してわずかな版築盛土で構築されていた。

後円部の墳丘内部には、玄室部を中心として半径９mの列石が巡るが、羨道部分及び前方部との接続点ではとぎれていた。なお、葺石、埴輪等は認められなかった。

〈石室〉

後円部封土のほぼ中心部に玄室が設けられ、羨道部は西側封土端に開口する。

石室は石灰岩と一部安山岩を用いた割石小口積の横穴式単室墳である。

〈羨道〉

幅1.1m、長さ６m、高さ1.55m。玄門より約3.3mの部分までは巨石を壁面下部に据え、上部は割石をわずかに持ち送りして積みあげ、天井部に石を据える。羨道前端部は、巨石を用いず割石の小口積で側壁を築き天井はない。玄門より３m付近に安山岩の板石による閉塞遺構（追葬時）がある。これより前端部は北の方向に曲がり、入口部分で中心部より約１mの歪みが見られる。

〈玄室〉

一辺3.8mの隅丸のほぼ正方形。側壁は割石をゆるやかに持ち送りに積み、天井石として一枚の巨石を渡す構造であるが、盗掘などにより天井石は床面に斜めに落ち込んでいた。側壁の残存高は2.7mであるが、当初は３m以上の高さがあったと思われる。埋葬場所は、中央通路をはさんで左右の屍床、正面の石屋形の三区に分けられる。玄室内の床面には安山岩の敷石が施されている（中央通路と北側屍床部の残り良好）。通路の敷石下には白粘土が張られている。

石屋形は安山岩からなり、各１枚の巨石で奥壁、両側壁、両袖石が据えられ、偏平楕円形に加工された屋蓋がかけられている。この石屋形の左右袖石、軒縁、２つの屍床部と通路を区切る仕切石などに装飾が施されている。

〈装飾〉

玄室内に見られる装飾は、全面に丹を施した単彩色と幾何学文様に大別される。

単彩色：石屋形の屋蓋裏、側壁、玄門付近の羨道部天井石下面、床敷石（一部）、通路敷石（一部）

文　様：石屋形軒縁～連続三角文（赤色のみ残る）

石屋形左右袖石～左－双脚輪状文が中央に、周囲を赤青白の三角文がとりまく。

右－重圏円文（中心から赤青白の循環を繰り返す）、三角文、双脚輪状文等からなる。

石屋形正面石障～連続三角文

左右屍床の石障～連続三角文

この他天井石や石屋形奥壁にも一部三角文が認められるが剥落等が激しい。

（なお、これらの装飾石材は、文様の剥落防止のため、移築前に薬剤処理がなされている）

〈遺物〉

・石室内出土遺物

装身具：金環11、勾玉３、管玉２、丸玉小玉類約200

鉄　器：鉄鏃類86、刀子６、金銅刀装具４、馬具類（轡２、鐙鞍１、尾錠２、飾金具21）

須恵器：高杯、杯、提瓶、甕

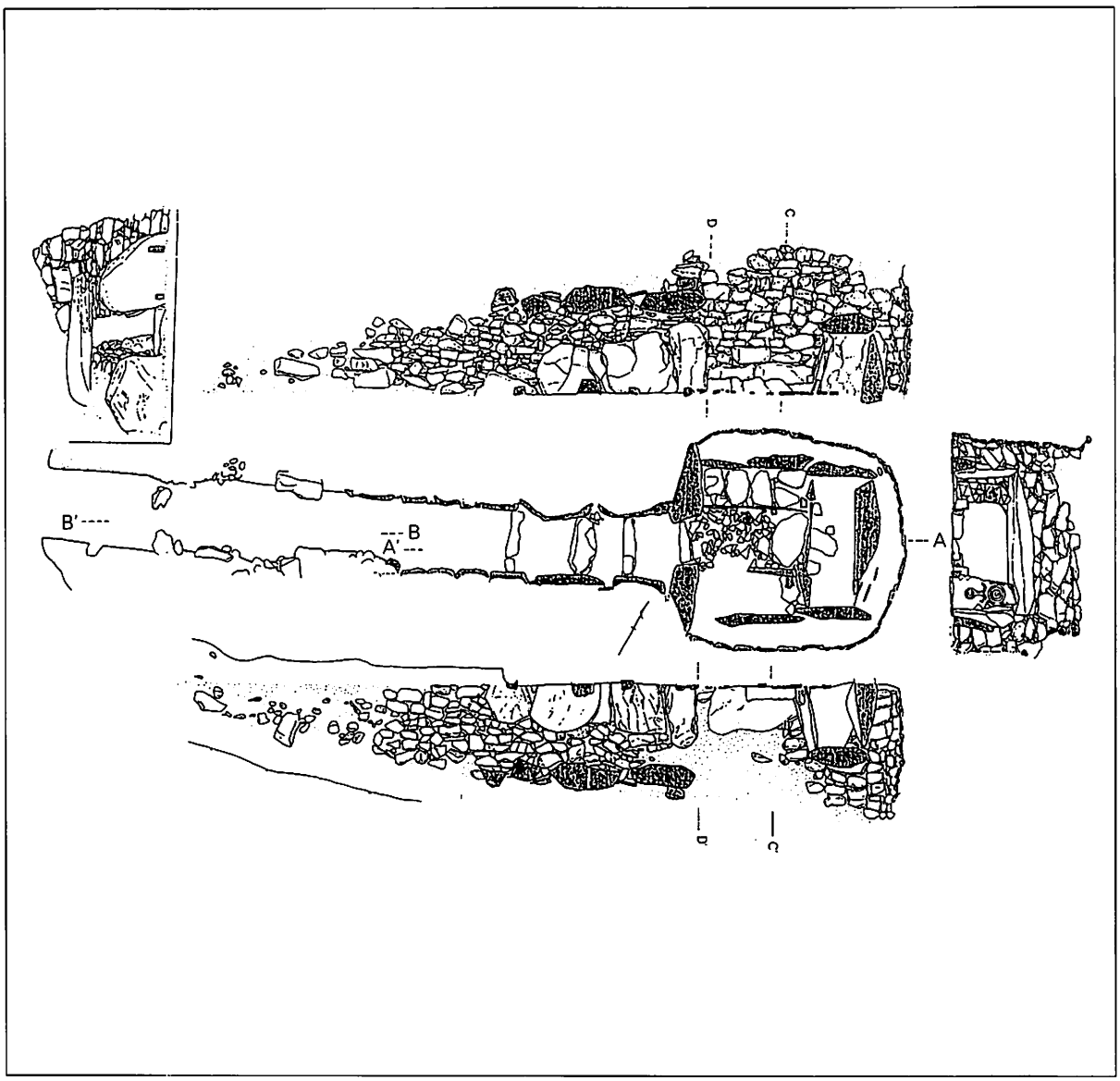
土師器：壷、高杯
その他：砥石
特に、金環、小玉など北屍床からの出土物が多い。

・石室外出土遺物
須恵器、土師器を主とする土器類で、出土場所は羨道入口左封土中、羨道入口周囲、および羨道入口右墳裾などである。特に右墳裾の場合、故意に割られ一括してまとめて埋納された形跡がある。須恵器の高杯、杯、壷等が多い。

〈発掘時の状況〉
早くに盗掘にあい、玄室南壁は破壊され、天井石は床面に接し斜めに落ち込んでいた。玄室の敷石も撹乱され南屍床、石屋形内にはほとんど残っていない。

〈築造年代等〉
石室、墳丘規模・形態、出土遺物等から古墳時代後期（６世紀後半）の築造とみられる。

第４図　　移築前の石室展開図



第２章　復原整備事業の概要

（１）事業の目的

横山古墳の事業の目的は以下のとおりである。

《貴重な歴史的、文化的遺産である横山古墳の石室の保護》

かつて鹿本郡植木町の丘陵上に築造されていた横山古墳は、装飾をもつ前方後円墳であり、考古資料として貴重な価値を有する。今はその墳丘はなく、また石室も解体され石材が保存されてきた状態であるが、考古学上、歴史学上等の学術的にみても貴重な文化財である横山古墳の石室を保存することを大前提とする。

石室保護手法については、石室の旧状や性格を十分に把握し、必要に応じ近代工法や技術を導入し、適切な保存整備を行うものとする。

《貴重な歴史的文化的遺産である横山古墳の石室の活用》

石室の適切な保存のもと、再びその石室を蘇らせ内容を広く一般に公開し、人々に石室そのものの価値をわかりやすく示し、その理解を求めるよう整備活用する。

装飾文様をもつ石室については、見学施設を設けるとともに、墳丘の規模形態も併せて復原し、一般の人々に親しまれ、小中学生にも身近な文化財としてその内容が理解できるよう、周辺環境整備も併せて行うものとする。

《他の遺跡や関連施設と連携できるような空間整備》

移築復原地は肥後古代の森（鹿央地区）内であり、周辺には既に装飾古墳館をはじめ岩原古墳群等の主要史跡がある。これらの施設と一体的利用が図れるよう配慮するとともに、単に教育、学習的な意味あいばかりでなく、文化レクリエーション的要素をもつような空間整備を図っていく。

（２）事業の経緯

横山古墳は昭和44年、九州縦貫自動車道の建設に際し発掘調査を行い、石室石材については、収蔵庫で保管してきたが、その眠っていた貴重な文化財を再び蘇らせ、文化財の普及活用の一環として役立てるため肥後古代の森（鹿央地区）に移築復原することとし、事業を進めていくこととなった。

（３）移築復原地の概要

横山古墳の移築復原地は肥後古代の森（鹿央地区）の南部に位置し、移築復原地西方の台地上には国指定史跡の双子塚古墳、馬不向古墳等からなる岩原古墳群がある。

敷地面積は約3,700㎡で西側道路との取り付き部法面を除けば、標高67.05～68.25mのほぼ平坦な地形である。

敷地形状は東西に長い長方形をしており、東西約80m、南北45～50mである。

敷地の南側及び西側は幅員４～５ｍの町道に接し、東側が幅員２ｍの里道に接している。西側道路は敷地の西部に広がる古墳群台地上に達する坂路となっており、道路と敷地の取り付き法面は北西隅部で約４ｍの高低差を生じている。なお、この西側道路の西側路肩も約４ｍの法面になっている。

（４）事業の内容

イ）計画・設計

装飾文様が描かれた石屋形袖石は、発掘調査後東京国立文化財研究所に保存処理を依頼していた。その後、肥後古代の森整備事業の一環として平成３年度に基本設計及び実施設計を株式会社空間文化開発機構に委託した。

ロ）工事

実施設計に基づき、平成４年度に造成排水工事、墳丘石室復原工事、外構植栽工事の３工事に分割し、教育委

員会文化課が主管し、工事は山鹿土木事務所が担当した。なお工事監理を株式会社空間文化開発機構に委託した。

（５）事業体制

事業関係者は次の通りである。

熊本県教育委員会

文化課長	大塚　正信
文化課教育審議員（課長補佐）	隈　　昭志
文化課主幹兼経理係長	木下　英治
文化課参事	中村　幸宏
文化課文化財調査第一係長	島津　義昭
文化課文化財調査第二係長	松本　健郎
文化課文化財保護主事	山城　敏昭

県立装飾古墳館

主幹兼学芸課長	桑原　憲彰

熊本県山鹿土木事務所

所長	木村　和臣
工務課長	清田　　弘
工務課第一係長	牧野　　浩
工務課第一係技師	上田　邦彦

株式会社空間文化開発機構

代表取締役	真鍋　建男
主任研究員	池畑　和子
主任研究員	西岡　泰史

施工請負

造成排水工事

㈲上村建設　代表取締役	上村　次雄

墳丘石室復原工事

㈲新和建設　代表取締役	富田　秀俊

外構植栽工事

㈲園田建設　代表取締役	豊田　　功

（6）事業費

総事業費、各工事費は下記に示すとおりである。

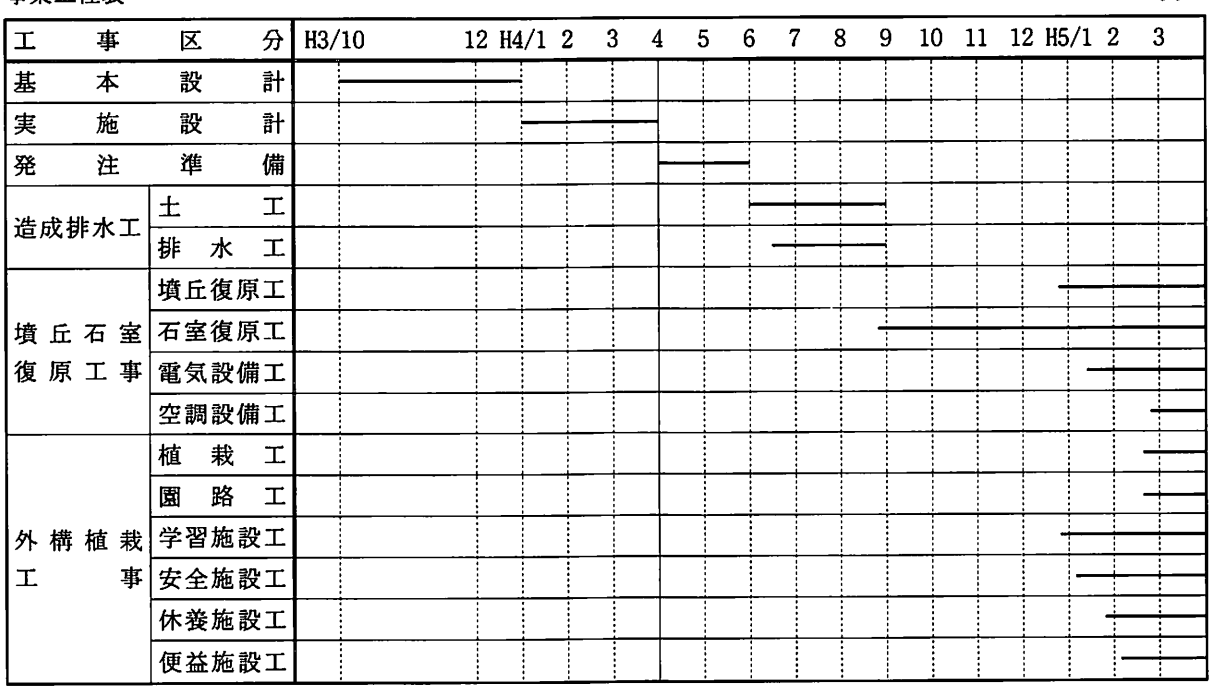
事業費一覧表　　表2

委託・工事名		工　種	金　額（円）
平成3年度	設計		6,509,000
	小計		6,509,000
平成4年度	造成排水工事	土工	7,596,655
		排水工	
	墳丘石室復原工事	墳丘復原工	57,365,254
		石室復原工	
		電気設備工	
		空調設備工	
	外構植栽工事	植栽工	24,063,129
		園路工	
		学習施設工	
		安全施設工	
		休養施設工	
		便益施設工	
	工事監理		2,426,000
	小計		91,451,038
合計			97,960,038

（7）工程

事業期間は、平成3年10月より平成5年3月までとした。

事業工程表　　表3



※工事区分は発注工事区分である。

第３章　復原整備計画

（１）計画の理念

装飾をもつ横山古墳の復原整備にあたり、その整備の目標を次のように設定した。

「装飾古墳である横山古墳の石室の保護」

横山古墳は石屋形をもつ前方後円墳で、石室内石屋形等には幾何学文様を施した装飾が随所に見られる。前方後円墳で装飾をもつ古墳は稀少であり、石屋形袖石に描かれた双脚輪状文などは、考古資料としても日本を代表する高い価値があるといわれている。

この貴重な横山古墳を計画地に移築復原整備するにあたり、本来の横山古墳の姿を長く伝えるために装飾古墳としての石室保存を大前提とし、現代工法や技術などの導入により適切な石室の保護を図るものとする。

「横山古墳の石室の公開展示」

肥後古代の森（鹿央地区）内に横山古墳を整備するにあたり、石室の保存に努めるのみでなく、一般の人々の古墳への理解を深め、さらには文化財保護に寄与するため、貴重な装飾文様をもつ石室を見学者に公開し、その活用にも努めるものとする。

「県立装飾古墳館の野外展示施設としての役割」

熊本県は装飾古墳が日本で最も多く、県立装飾古墳館はその情報集積地として重要な役割をもち、古墳館の内部では県内の主な装飾古墳のレプリカが展示されている。横山古墳はこれに対し、実物展示施設として古墳本来の姿（墳丘復原）の中で、実物を見学できるという大きな意味をもつ。このため横山古墳を装飾古墳館の野外展示施設として位置づけ、文化財の実物にふれるというニーズに応えるものとする。

（２）復原整備方針

①復原整備方針

〈石室復原〉

解体保存されていた横山古墳の石室石材を使い、移築復原地において石室を復原する。また、その配置においても石室の入口、玄室の方位を横山古墳のかつての石室方位に合わせる。石室の羨道部石積復原、玄室側壁石積復原、玄室内石屋形、屍床部などの復原整備を行う。玄室側壁は調査時残存高2.7mで、一部盗掘により破壊された箇所もあり、天井石落下状況などから当初の玄室高さは３m以上あったと想定される。復原整備は発掘調査時最高部の2.7mの高さまでとする。また、側壁に用いられている石材（石灰岩）など風化が見られるものについては、適宜薬剤により強化・撥水処理を行い、石材の劣化防止策を講ずる。

〈装飾文様の保護〉

横山古墳の石室には幾何学文様の装飾が施され、その考古学的価値は高い。このため装飾文様の保存という立場で、千数百年の間装飾を保ってきた古墳本来の自然環境に近づけるような石室保護施設を設けるものとする。

〈石室覆屋〉

肥後古代の森（鹿央地区）内にある移築復原地に、横山古墳を移築復原する意義を十分に踏まえ、石室の保存を図りながら、かつ広く一般の人々に実物の装飾古墳の公開を図り、歴史的に貴重な遺産の周知に努める。このため装飾古墳石室の保存及び公開のための覆屋を設けるものとする。

〈墳丘の復原〉

石室を復原整備し、かつ保存、公開のための覆屋の整備に加えて、築造時の横山古墳の姿をイメージしやすくするために、墳丘形態を復原整備する。なお、石室保存のための覆屋は横山古墳の墳丘形態を損なうことのないよう、墳丘内部に納めるものとする。

また、墳丘表面の仕上げについては、周辺古墳群と同一の整備手法（張芝）を用いると当初から存在していた古墳と混同する恐れがあるので、新たに当地に移築復原したことが分かるよう仕上げを変えて整備するものとする。

②周辺施設整備方針

〈広場〉

復原整備する古墳の周辺には、見学者のための休憩及び野外学習のための広場を設ける。周辺はできるだけ開けた空間とし、広場中心部にある古墳を視認できやすくする。

〈園路〉

横山古墳の石室を計画地に復原整備し、訪れた人々の多くが石室内も見学できるような動線としての園路を、エントランスから石室入口まで整備する。

〈学習施設〉

見学者のための学習や古墳の解説施設として、解説板を設ける。なお、石室内部の解説については、覆屋内に設置するものとする。

〈休養便益施設〉

見学者の休養、便益施設として、ベンチ、縁台を広場に適宜配置する。

〈安全施設〉

エントランス部には周辺道路との境に安全施設としての車止めを設置する。

③修景整備方針

〈植栽〉

敷地は肥後古代の森（鹿央地区）の岩原古墳群に隣接している。この岩原古墳群の整備は、墳丘及び周溝等を張芝し、中高木の植栽は施さないことにより墳丘を強調している。

横山古墳が岩原古墳群に含まれているものであれば、当然同様の修景方針をとるべきであるが、横山古墳は他地区から移築復原する古墳であり、他の古墳と混同されないように景観的に他の古墳と区別する必要がある。また横山古墳の敷地は周囲を道路や農地で囲まれているため、境界明示を意図した低木の列植などを行うとともに修景木や緑陰樹を適宜植栽する。

〈構造物〉

移築復原地区に整備される構造物としては、ベンチ、縁台、解説板が考えられる。これらの規模、高さ、色彩等の仕様については、復原整備する横山古墳の墳丘に調和するものとし、また周辺の歴史的景観とも違和感のないものとする。なお、設置場所は周辺の主要展望点からの視界の妨げにならないように配慮する。

（３）計画概要

①造成計画

横山古墳の移築復原地の基礎づくりとなる造成計画は以下のように定めた。

・敷地においては埋蔵文化財はないものと思われるが、周辺には古墳等が分布するため石室覆屋が立地し、切土が必要な箇所はあらかじめ調査を行い、遺構等の有無の確認を行う。
・周辺の道路や隣地と自然な形ですりつくよう、特にエントランス部においては盛土造成を行う。
・整備後の雨水排水処理を考慮し、西側から東側へ向けての緩傾斜造成を行う。
・敷地西側は一段高いところに道路があるため、緩やかな法面造成とする。

②雨水排水計画

移築復原地の雨水排水計画は以下のように定めた。

・造成地形にしたがって敷地西側から東側に向けての表面排水とする。
・敷地周囲には開渠側溝を設置し集水する。
・集水された雨水は敷地南東部隅から地区外に放流する。

③遺構整備計画

〈墳丘〉

墳丘形態は発掘調査時の測量図を基に、その他の類似する古墳の墳丘形態等により検討を行い、縮尺1/100の墳丘の粘土模型を作成するなど検討しながら修正を加え、最終形態を決定した。その結果、墳長において後円部と前方部の比率を８：４とし、その規模は全長39.5m、後円部直径29m、前方部先端幅19m、墳頂部高さ５ｍとする。

移築復原施設である横山古墳の墳丘は、往時からこの場所に存在している他の古墳と同様の仕上げを施さず、自然の土色に似た舗装材料で施工する。

〈石室〉

石室については発掘調査等の資料に基づき計画を定めた。羨道、玄室、石屋形等の石材には撥水強化保存処理を施して保護する。

また、玄室側壁については、高さ約2.7ｍまで往時の石材を利用し、発掘解体図に基づき積み上げて復原的整備を行う。

往時の石材が不足している部分には、類似した石材を購入し整備する。

羨道部は同じく往時の石材を利用し、発掘時の資料に基づき高さ約1.5ｍまで積み上げ、天井石を設置する。不足する石材は類似する石灰岩の補足石材を使用する。なお、羨道部前端は覆屋との関係で全て復原できないため、入口部については覆屋内の床面に平面的規模を明示する。

装飾をもつ石屋形等は調査時の資料に基づき、もとの位置、形状に設置する。

〈覆屋〉

覆屋は、墳丘の中に納まる地中構造物となるため、構造及び形式は、壁式鉄筋コンクリート造とする。

また覆屋内の石室は、常時、密閉した状態で一定の温度・湿度を保つことのできるよう、覆屋の躯体全面に外部防水を施すものとする。また覆屋本体は、墳丘内部に収納されるように覆屋の規模決定には注意を要するため、1/100の墳丘模型を作成し、覆屋の規模、形態を検討し決定した。

覆屋の見学室及び前室については、結露防止、石室温度保存に重点を置き、見学室及び前室を出来る限り石室内と同温度を維持できるように空調設備を設置する。

前室内には、見学者が常時、石室の温度、湿度を認識できるよう温湿度表示盤を設ける。

見学室内の見学窓には、石室内部側にワイパーサッシュを設置し、万一結露した場合においても見学室側からハンドル操作により、見学者が容易に対処できるようにする。

④周辺施設整備計画

〈園路〉

周辺園路から進入しやすいよう敷地南西角にエントランスを設け、このエントランスと石室入口を連絡する。

園路の仕様は管理用車両の通行に配慮し、幅員は4.0mとし、仕上げ材は周辺との違和感のないよう土色の真砂土舗装とする。

〈学習施設〉

解説板は、写真の表示が容易で鮮明であることや管理面からの耐久性などを考慮し、陶板とする。また陶板の台座、表面仕上げの材料は、周囲の景観及び耐久性などから自然石とする。

解説板はエントランス部及び、覆屋内に設置する。

〈安全施設〉

エントランス部に車止めを設置し、一般車両の進入を防止する。

車止めの材質は白色系自然石とし、取り外し可能なものとする。

〈休養施設〉

敷地南側に利用者の休息、集いに利用できるに木製のベンチ３基、西側に縁台３基を設置する。それぞれの材質は、周辺園地に調和するよう土台を自然石で、座席部分を木製とする。

第４章　施工

（１）石室復原工事

石室復原工事は平成４年８月中旬から平成５年３月下旬までの期間で行った。工程としては準備工、石材強化撥水処理工、石積工に区分できるが詳細は以下に示すとおりである。

〈準備工〉

石室復原工事の準備工として、まず昭和44年に解体し保存されてきた石材の確認作業を行った。

現地ですべての石を広げ、解体当時の石材番号の確認を行った。天井石や袖石などの巨大な石材や長尺物の石材は、発掘解体図で復原箇所がはっきりと判別できた。その他の同じような形態の石材は、解体当時、記入されていた番号を確認しながら石材の積み上げ位置を確定した。番号が判別不能なものは、発掘解体図により適切な箇所に設置するよう、検討のうえ、決定した。

〈石材強化撥水処理工〉

石材強化撥水処理は、まず石材をブラッシングし、エアー吹付及び水洗いの手法により清掃、浄化した。石材の清掃、浄化完了後、浸漬（しんし）工法により含浸処理を行い、浸漬工法の不可能な石材は、スプレー工法により含浸処理を行った。

なお、保存強化撥水処理に際しては遺構石材と同様な石材を用い、試験施工を行った。強化剤は、石材強化剤OH（ドイツ：ワッカーケミー社製品）、撥水剤は、石材撥水剤280（ドイツ：ワッカーケミー社製品）を使用し、強度、色、透過性、撥水性について検討を行った。

試験方法は、４個のサンプルピースをそれぞれ水で洗浄後、屋外で24時間自然乾燥させ、計量後、それぞれサンプルピースを２個づつ大きさの違うもの同士を区分し、水と強化剤OHに20分間含浸させ、２週間養生後、それぞれ計量を行い、含浸量を測定した。このときの含浸量は、石材内部でのSiO_2（二酸化ケイ素）の形成量を示すものである。この後、強化剤OHを含浸させたサンプルピースに撥水剤280を同様に20分間含浸させ、養生後、それぞれ計量を行った。以下に試験計量表を示す。

計　量　表

サンプルピースNo.	含浸前計量（g）	含浸後計量（g）	含浸量（g）	反応後計量（g）	SiO_2形成目安（g）	含浸前計量（g）	含浸後計量（g）
1	（OH）663	665	2	664	＋1	664	665
2	（水）435	436	1	435	0	－	－
3	（OH）1544	1546	2	1545	＋1	1545	1546
4	（水）886	887	1	885	－1	－	－

《試験結果まとめ》

（強度）天然物のため、風化の度合いが異なり、均一なテストピースの作成が困難なため、手触により判断した

結果、良好であり、上記計量表からも強化剤は十分含浸していると判断できる。SiO_2形成目安からも水を含浸したNo.2，4は、水分が蒸発減量しているが、No.1，3は、SiO_2が形成され、増量している。

（色）強化剤で処理した石材と未処理の石材とは、凝視すると若干の違いはあるが、光沢等が発生せず、自然な仕上がりとなっている。

（透過性）強化剤含浸後も気孔は塞がれておらず、石の性質は変化していない。

（撥水性）風化した石材を強化剤で処理後、撥水処理を行ったが、結果は良好であった。

以上のような試験施工結果をもとに、石材強化撥水処理を行った。

〈復原石積工〉

玄室部分の側壁は、発掘当時最も高く現存していた高さ2.7mまでを復原した。石材が不足している箇所にはもとの石材に類似した補足石を用いた。

また羨道部分は、全延長が6mあるが、そのうち玄門から3.5m区間を完全復原するものとし、その他は平面表示とした。

補足石については、県内を各所にわたり踏査した結果、玉名郡玉東町木葉地内から採取した石材が最ももとの石材に類似していることが分かり、これを使用した。

概ね石材の確認が終了したところから、石室の復原石積を開始した。当時の発掘解体図と照らし合わせながら覆屋石室内に整備レベルまで真砂土を搬入し、均した後に糸を張り、平面的な丁張りを行った。

次に石室位置決めのキーポイントとなる羨道部袖石の据え付け位置を確定し、クレーンで設置し、袖石を始点として玄室周囲の石積を開始した。

玄室周囲の石積を開始するに当たって最初に2㎡程度をもとの石材と補足石を用いて次の要領で試験施工を行った。

もとの石材、補足石の据え付けは、積み上げる石材の間に補足石の形状を整えて組み込み、裏込材に透水性真砂土処理舗装材を充填し、コテ、手で直接締め固め、据え付けた。

据え付けに際しての目地詰め材及び裏込材は、真砂土、セメント、MR-7S、水を混合したもので行った。その配合は下記に示すとおりである。

真砂土モルタル配合表　　表4

セメント	真砂土	水	MR-7S
170kg	1㎥	適量	18ℓ

前述の積み上げ工法により試験的に石積を行い、確認検討の後、同工法で、残りの玄室周囲の石積を施工した。

石積完了後、再度検査を行い、確認した。

次に羨道部分の石積も同様に行った。玄室、羨道部ともに人力での搬入が困難な巨石を設置しなければならないため、覆屋の躯体の天井スラブは、石積作業完了後に設置するようにした。据え付けに必要な巨大石材は、毛布及び板枠などにより十分に養生を行い、クレーンで吊り上げ天井部分より搬入し、据え付けた。

羨道部側壁石積終了後、発掘解体図を参考にし、羨道天井石の据え付けを行った。石材の養生については、前述の手法で行った。

羨道部天井石据え付け完了後、敷地横で製作していたプレキャストコンクリートの天井スラブをクレーンで設置し、羨道部の復原作業を完了した。

天井スラブを据え付ける際に、躯体の接合部分には、膨張ゴム、シーリング等を施し、外部からの漏水防止に配慮した。

次に玄室の石屋形、屍床等の石材の設置を行った。

施工前に仕上がりレベルまで均した真砂土を部分的に掘削し、据え付け場所を設けた。

装飾石材の搬入、据え付け時には、特に装飾面を損傷しないよう毛布やビニールクッション材等で厳重に梱包し、十分に注意して据え付け作業を行った。

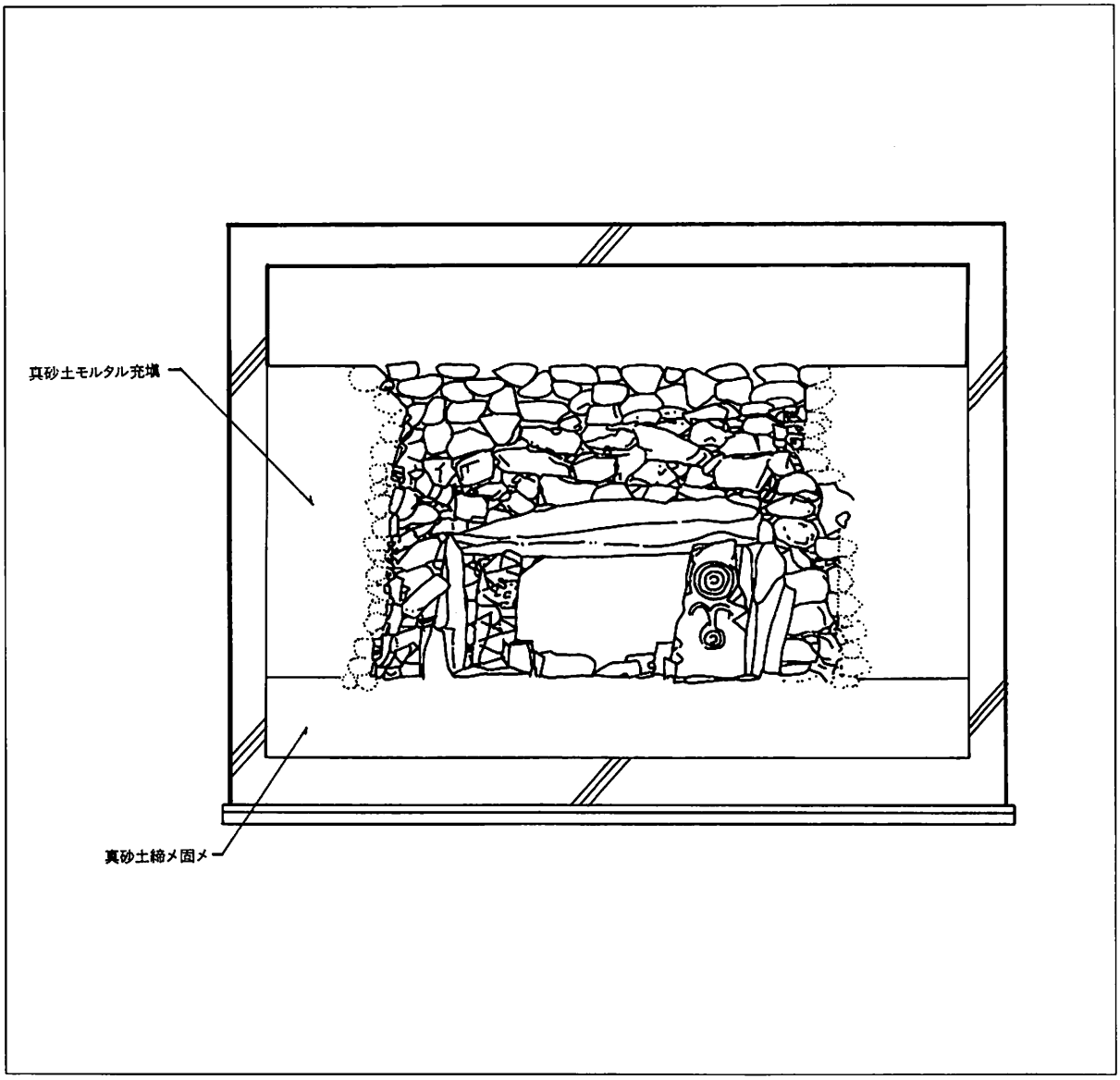
据え付け時には、文化財専門職員の立会のうえで作業を進めた。クレーンの必要な石材の搬入、据え付けが完了した時点で羨道部と同様に天井スラブを設置した。

天井スラブ設置後、人頭大以下の石材等を人力で石室内に搬入、設置し、関係者立会のもとに確認作業を行い、復原石積を完了した。

施工量は以下のとおりである。

・石材強化撥水処理工	51.5㎡
・玄室復原石積工（遺存石材）	31.0㎡
・玄室復原石積工（補足石材）	7.0㎡
・羨道部石積工（遺存石材）	12.5㎡
・羨道部石積工（補足石材）	10.0㎡
・天井床石敷工	13.0㎡
・天井石、石屋形据付	40　石

第５図　　石材裏込強化断面図



（2）覆屋建築工事

覆屋建築工事は石室復原工事と並行して平成４年８月下旬から平成５年３月下旬の期間で行った。

①建築工事

建築工事の工種及び数量は以下のとおりである。

・基礎工事	基礎砕石	10.0 ㎥
	コンクリート	5.2 ㎥
・コンクリート工事		114.0 ㎥
・型枠工事		438.8 ㎡
・鉄筋工事		10.1 t
・防水工事	アスファルト防水	228.02㎡
・タイル工事		46.5 ㎡
・左官工事		93.4 ㎡
・塗装工事		70.0 ㎡
・建具工事		1 式
・解説板設置工事		1 基

なお、建築施工面積は98.2㎡であった。

建築工事を施工するに際して、土工等の掘り方は文化財専門職員立会いのもと、人力で掘削し、埋蔵文化財の有無の確認を終えた後に基礎工事を開始した。

コンクリート打設時期が冬季になることが予想されたのでコンクリート強度の温度補正を30kg/㎠見込み、Fc＝240kg/㎠とした。

計画敷地内からは、遺構が確認されなかったため、工事は概ね通常の建築工事と同様となったが、本構造物は、墳丘の内部に設置される地下構造物となるため、躯体コンクリート打設養生後、型枠脱型し、外部のすべての面に防水を施した。

施工に際しては石室内部に搬入する石材を上部からクレーンで搬入できるよう考慮し、天井スラブをプレキャストコンクリートとし、石室内の石材の搬入完了後にスラブを設置するように施工したため、防水工事は最終工程となった。

防水工事は、アスファルト防水E-1工法で壁、スラブすべてを防水した。

また同施工中にワイパーサッシュの製品検査を行った。

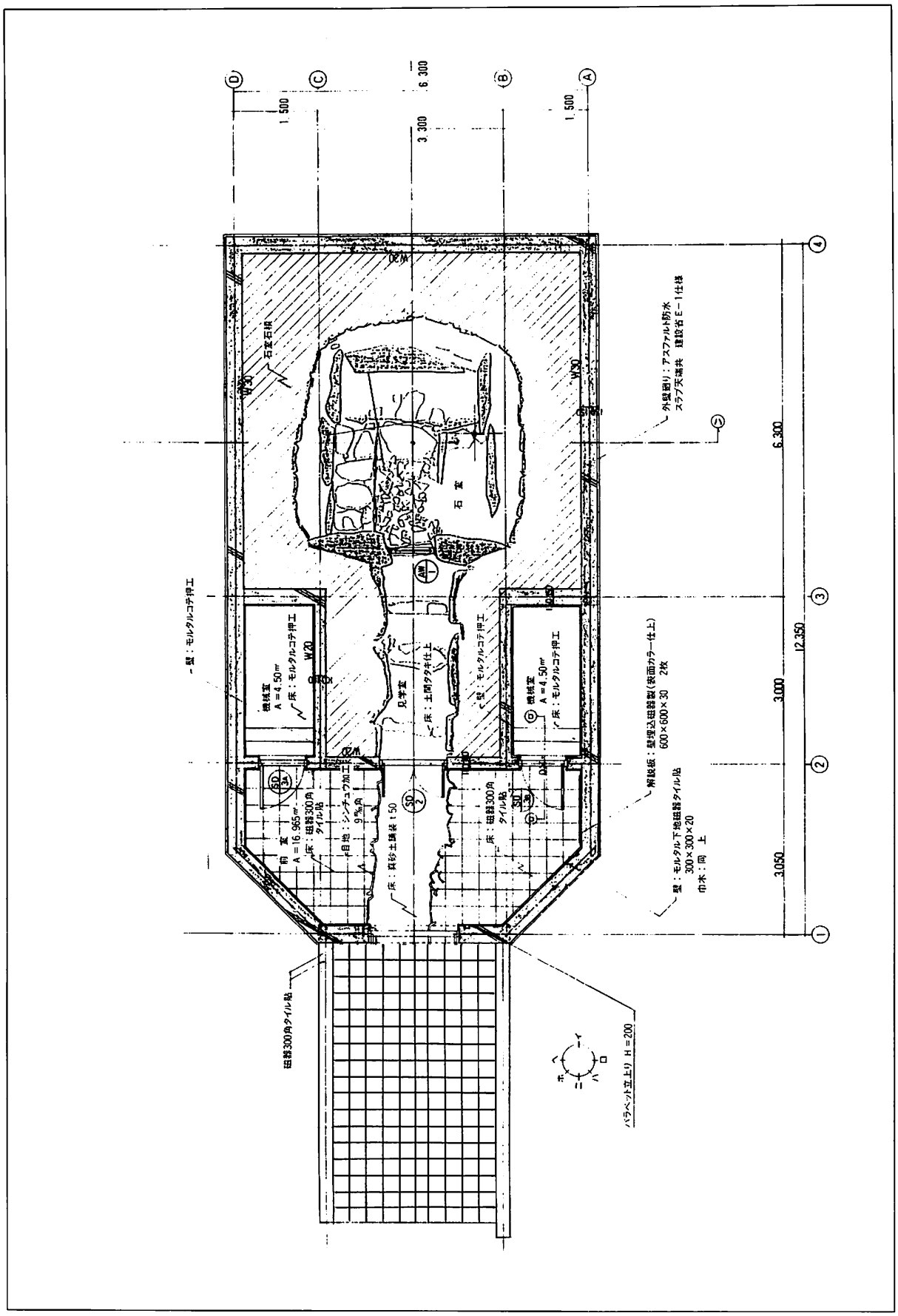
石室復原工事完了後、建具の搬入据え付けを行った。

床、壁面タイルについては、石室のイメージを保つよう茶色系統のせっ器質窯変タイルの色見本を作成し、検討のうえ色等を決定し、施工した。

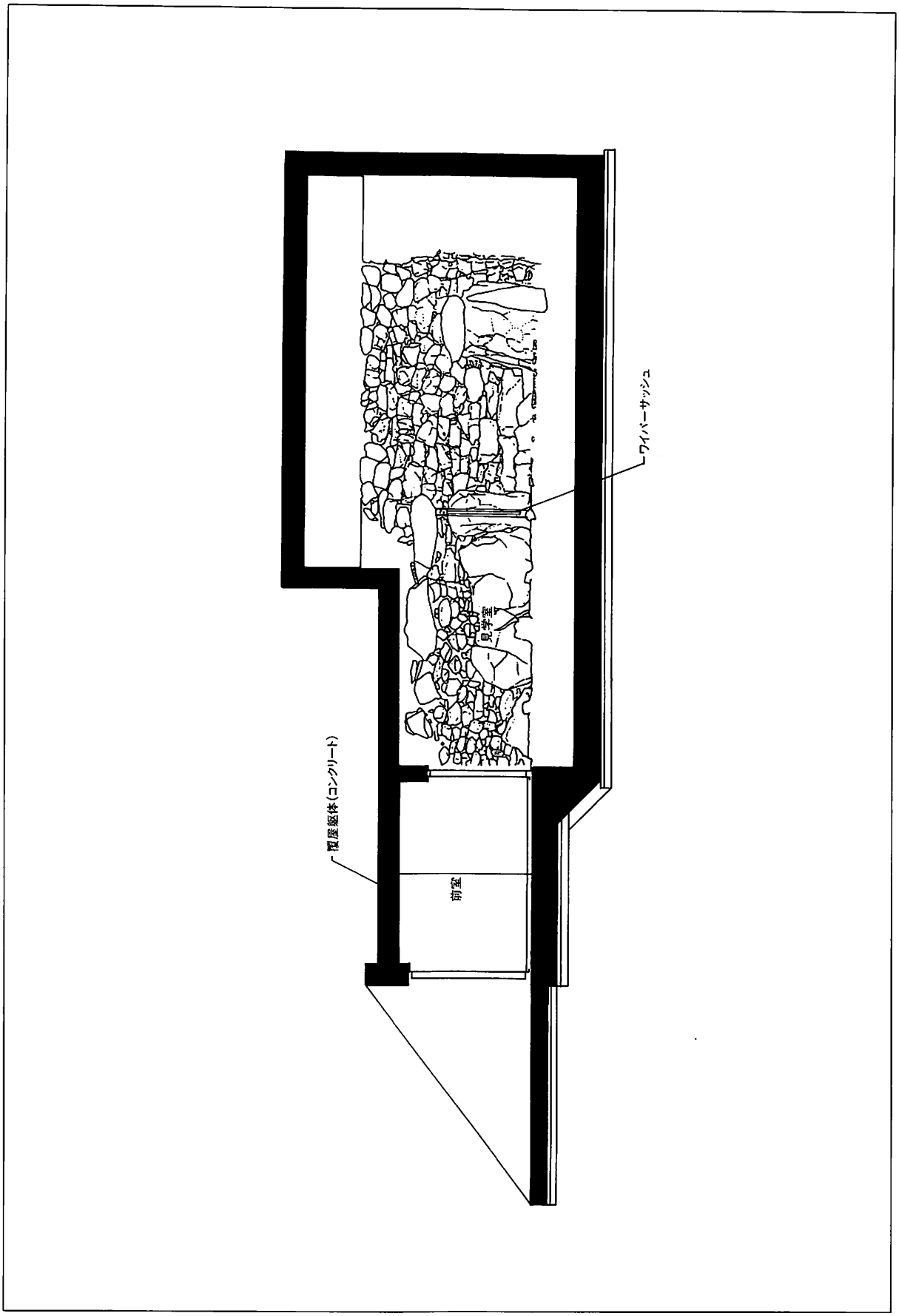
床面は、羨道部の平面的表示を行うため、真鍮の目地棒で出来る限り忠実に明示した。真鍮の目地棒で明示した羨道部の仕上げは、透水性真砂土処理舗装で行い、石室内部へのアプローチとした。見学室、前室それぞれの入口は、石室の温湿度保存に考慮し、エアータイト型の両開き扉とした。

また前室の壁面には、陶板製の解説板（^{W}1,200×^{H}600）を設置した。

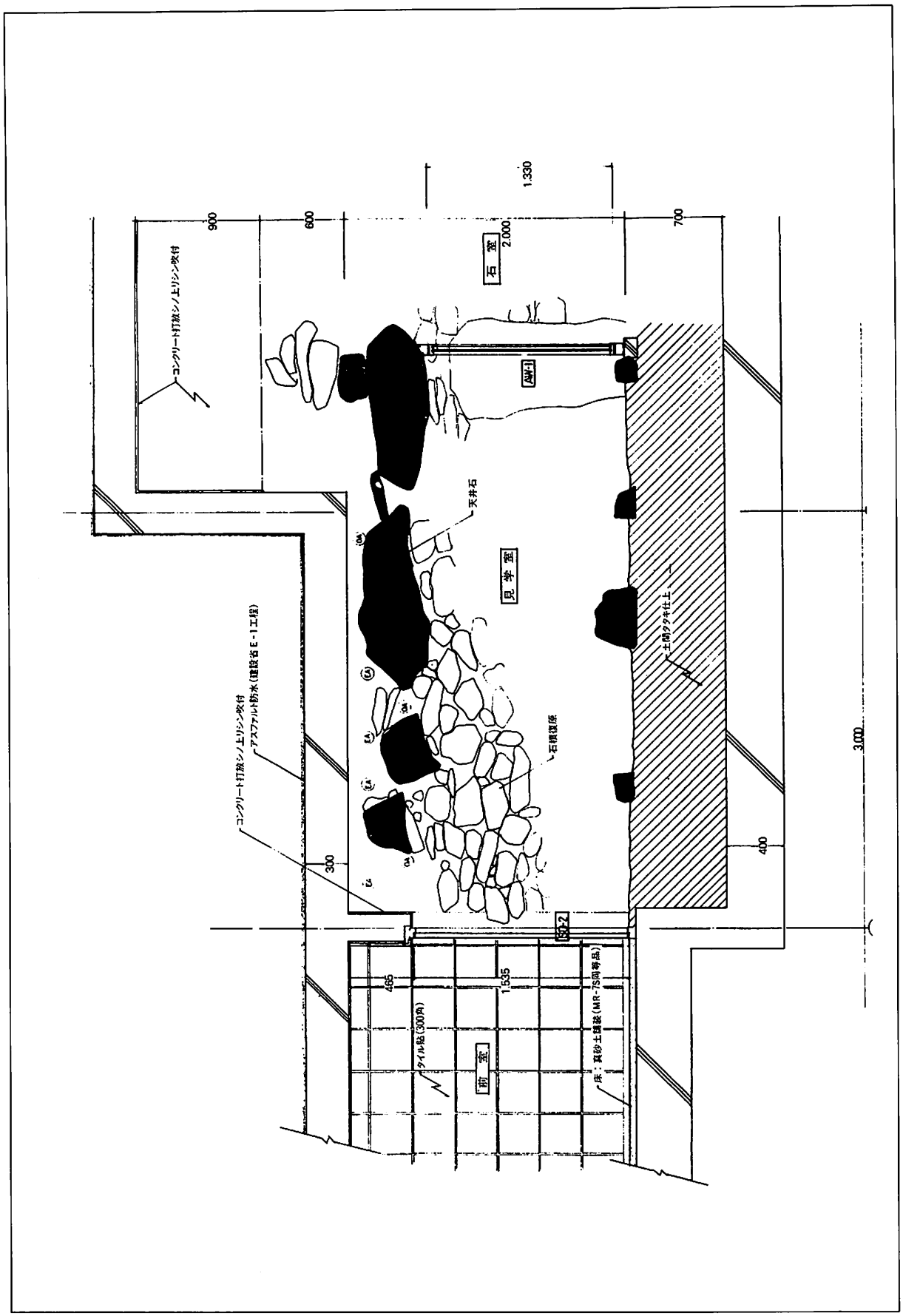
第６図　　覆屋平面図


石室
見学室
機械室
A＝4.50㎡
床：モルタルコテ押工
前室
A＝16.965㎡
床：磁器300角タイル貼
自地：シンチュウ加工
9%角
床：真砂土舗装 1:50
壁：モルタルコテ押工
床：土間タタキ仕上
石室石積
外壁塗り：アスファルト防水
スラブ天端共 建設省E－1仕様
解説板：壁埋込磁器製(表面カラー仕上)
600×600×30 2枚
壁：モルタル下地磁器タイル貼
300×300×20
巾木：同 上
磁器300角タイル貼
パラペット立上り H＝200
6.300
3.000
3.050
12.350
1.500
3.300

第７図　　覆屋断面図



第８図　　覆屋断面詳細図


900
600
1,330
2,000
700
石室
コンクリート打放シノ上リシン吹付
AW-1
天井石
見学室
土間タタキ仕上
石積復原
コンクリート打放シノ上リシン吹付
アスファルト防水（建設省E-1工程）
300
400
3,000
SD-2
465
1,535
タイル貼（300角）
前室
床：真砂土舗装（MR-75同等品）

〈覆屋内解説板表示内容〉

横山古墳の石室

石室の構造

石室は、後円部にあり、西向きに入口があります。入口から約６ｍの長い羨道（通路）が続き、その奥に玄室が設けられた単室の横穴式石室です。

玄室は、一辺が3.8mの隅丸のほぼ正方形の床面を持ち、割石を敷きつめた通路を挟んで左右に屍床があり、玄室の奥壁に沿って石屋形が設けられています。石屋形の前には、左右に灯明台のようなものが造り付けられています。

また、左右屍床の側壁側には壁に沿って板石が立てられており、肥後型石室の特徴をとどめています。調査の時には、天井石が落下していましたが、天井までの高さは本来３ｍ以上あったものと思われます。

使用されている石材は、石灰岩が主で、一部に安山岩が混じっています。

調査時の石室の状態

古墳の後円部の頂上に、凹地が残っており、古い時期に石室が崩壊していたことを物語っていました。

石室内は、盗掘による破壊がひどく、石屋形内と右屍床の敷石はほとんどがはぎ取られていました。

石室の右側に古い盗掘跡があり、右側壁と屍床の板石、仕切石が失われていました。多くの副葬品が出土しましたが、盗掘による攪乱がひどく、葬送時の位置をたもっているものはわずかでした。

装飾文様

石室内の装飾は、全面を赤色に塗った部分と幾何学文様に大別されます。幾何学文様の大部分は、石屋形の左右の袖石等に施されています。

左袖石には、その上部に双脚輪状文が描かれ、周囲は赤・青・白の三角文で埋められています。右袖石には同心円文、三角文、双脚輪状文が描かれています。

その他、仕切り石など石室の各所に、三角文、連続三角文が施されています。

石室の復原

今回の整備にあたっては、当時の図面・写真等を参考にして、可能な限り忠実に復原しました。また、一部不足する石材については、同質、同形状の石材を探し、これを使用しました。

盗掘、崩壊等により、全く旧形状の分からない石室の天井部分および側壁の上部については復原を行いませんでした。

また、盗掘等による石材等の移動で不明確な羨道部の一部と墓道については、復原から外しました。

②電気設備工事

電気設備工事は覆屋の躯体工事がほぼ完了した平成５年１月中旬から３月下旬の期間に行った。

工種は電力引込設備工事、電灯・コンセント・動力設備工事、及び温湿度検出器設置工事であった。

電力引込は、敷地東南隅に九州電力電柱より単相２線１回路、三相３線１回路を引き込み、地中深さ0.6mの位置に電線管を埋設し、覆屋内に配管配線を行った。

石室内は、照明で石屋形奥壁のみを照らすようにするため、石室上部に２基のスポットライト（ビーム球：75W）を設置した。

しかし、長時間のライト照射は、カビ等の発生の原因となることが予想されるため点灯時間を最小限に留め、また、点灯用のスイッチは、見学者の消し忘れ等を防止するため熱感応タイマー連動式とした。これにより見学者はスイッチを操作する事なく、自動的に照明のスイッチが入切されるようになる。

また石室内は、高湿度に保たれているため、照明器具（スポットライト）は防湿型とした。

見学室内の照明は、見学に必要最低限の照明とし、ガラス面への照明の反射を防止し、石室内部が見学しやすいよう白熱灯（ミニ球：40W）を２カ所設置し、これもスポットライトと同様に熱感応センサースイッチによる点灯方式とした。見学室は、復原した羨道部となるため、照明及びスイッチ等の器具類は、羨道天井石の透き間に設置し、上部の天井スラブから吊り下げ、遺構の石材を損傷しないよう注意して施工した。

石室内には、温度検出器１基、湿度検出器２基を設置し、前室内の壁面に取り付けた温湿度表示盤（ＬＥＤ表示）で石室内の温度、湿度を表示するようにした。

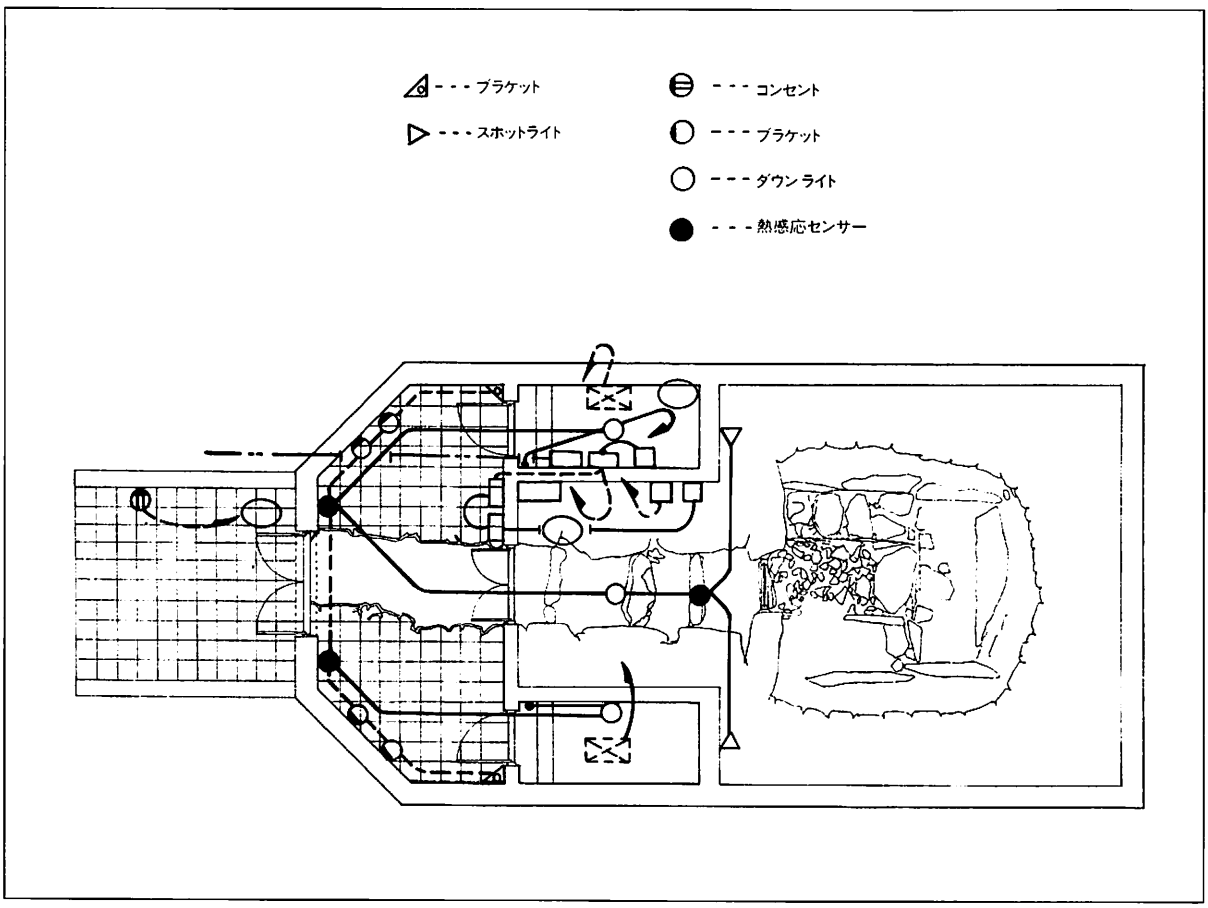
なお湿度検出器は２基の平均湿度を表示するようにした。

また機械室に据え付けた記録計（プリンター）には、２基それぞれのデータが記録されるよう設定した。記録計の記録用紙は、管理の手間をできるだけ省くため、１カ月無交換のものを組み込んだ。

前室については、天井隅２箇所にブラケットを取り付けた。また解説板用のブラケットを２基壁面に設置した。

見学室、前室ともに照明器具のスイッチは設けず、すべて熱感応センサーによる自動点滅方式とした。

第９図　覆屋電気設備系統図



③空調設備工事

空調設備工事は、建築工事及び石室復原工事の完了近い平成５年２月下旬から３月下旬の期間で行った。

空調設備については、空冷ヒートポンプパッケージ方式とし、冷房能力：2.8KW、暖房能力：3.8KWのパッケージを機械室に設置し、羨道部の側壁石積の積み上げが完了した時点で、空調ダクトの設置を行った。

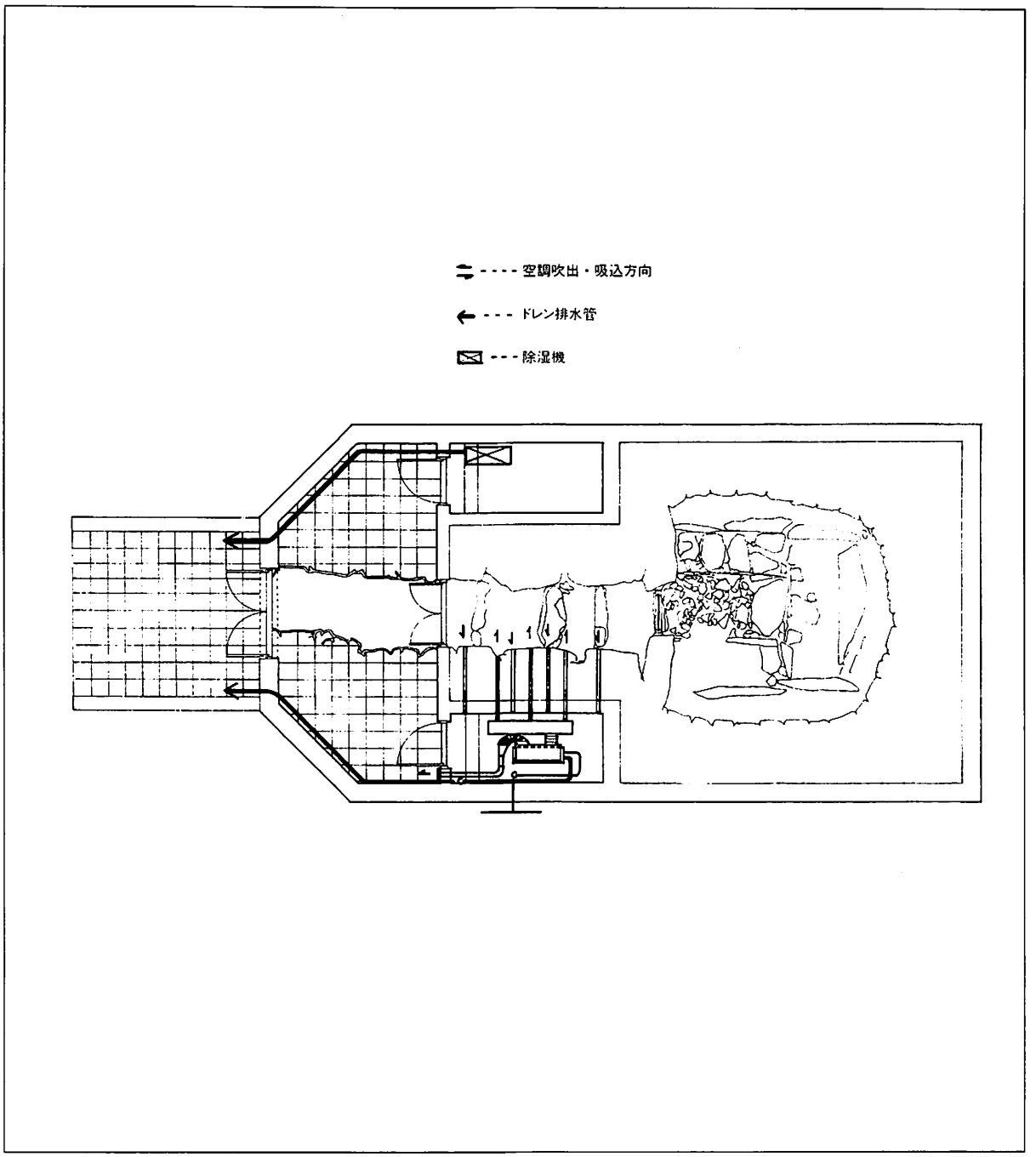
空調機械は、石室に向かって右側の機械室に据え付けてあり、ダクトは、羨道部右壁から吸気、排気を行うようにした。ダクトの直径は80～100φのものを使用し、グラスウール厚さ50mmを保温材料として巻き付けた。

それぞれの空調は、ダクトにより前室に１カ所（100φ）、見学室に３カ所吹出口（80φ）を設置し、前室は、ドアガラリ、見学室は、ダクト３カ所（80φ）により吸込口を設置した。

室外機は覆屋入口南の植栽帯の中に設置し、冷媒管を地中深さ0.6mの位置に埋設し、覆屋内に配管した。

除湿器は左側機械室の中に設置し、機械室ドアガラリから除湿することが可能なようにした。

第10図　覆屋空調設備系統図



（３）墳丘復原工事

墳丘復原工事は石室覆屋躯体工事が完了した、平成４年12月下旬から平成５年３月下旬の期間で行った。
墳丘復原工事の工種及び数量は以下のとおりである。

・墳丘盛土工　　2,315.0㎥
・法面整形工　　892.0㎡
・真砂土強化処理工　892.0㎡
（透水性真砂土舗装）

施工に際して現地での墳丘の平面的規模を明らかにするため、実施設計図に基づき、墳丘裾部ラインを現地で石灰で線引きし、主要な箇所に杭を打ち表示した。復原盛土は、墳丘勾配がきついことから、通常の真砂土では安定しないため、粘性の高い良質土で施工し、墳丘復原部分まで11ｔダンプトラック車で土を搬入し、0.45㎥バックホウで墳丘部を盛土した。

墳丘の各部分での高さの表示は各横断位置で丁張を行い、高さを確認しながら施工した。

覆屋から空調設備のドレン管や冷媒配管が突出し、外部へ排出されているため、こられを損傷することのないよう注意を払い、盛土を行った。

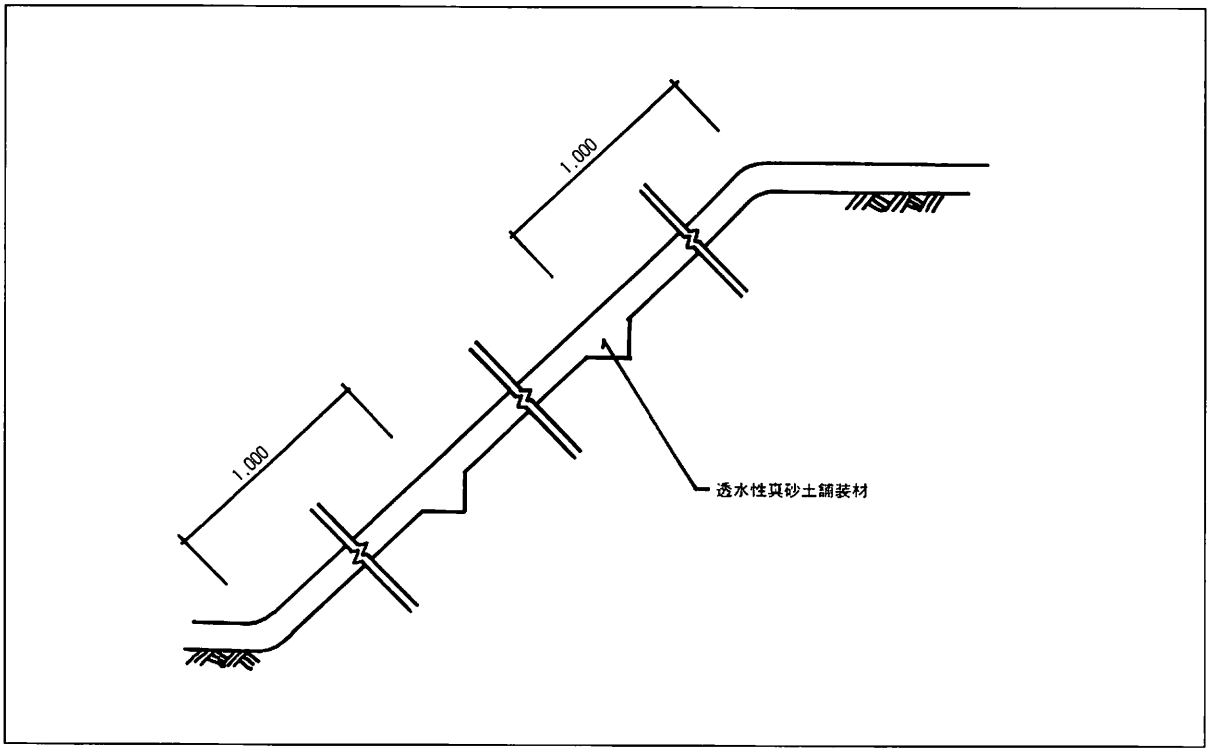
全体の墳丘盛土が完了してから、設計時に製作した模型と見比べながら墳丘形態の確認を行った。後円部は、設計どおり仕上がっていたが、前方部の側面の勾配がきつく、設計との相違が見られたため、側面部を断面的に天端の位置を変えずに法尻を0.5m広げ法面勾配を緩くした。断面的に天端の位置を狭くすると築造時期による墳形の変化に影響するため、天端の位置を変えずに法面を緩く施工した。

墳丘盛土完了後、表面仕上げの透水性真砂土舗装を行った。舗装厚は70㎜とした。勾配がきついため、下地の盛土面に高さ１ｍピッチで幅100㎜程度の段切りを行い、施工した。

急勾配の場所での施工であるため、舗装はすべて人力で行った。施工上、墳丘表面の舗装をすべて一度には施工できないため、放射線状に施工区分を行った。但し、舗装完成後に、この施工区分で目地が目立たないよう施工するように注意した。

舗装完了後、最終的な確認を行い、前方部の天端ラウンディングを手直しし墳丘復原を完了した。

第11図　　墳丘表層断面図



（4）周辺整備工事

周辺整備工事は平成４年12月から平成５年３月下旬の期間で行った。周辺整備工事の工程は園路工事、学習施設工事、安全施設工事、休養施設工事、雨水排水工事及び植栽工事であった。

①園路工事

園路は幅員4.0mの真砂土処理舗装で行った。

施工に際しては、基礎路盤は厚さ10cmの砕石（０～40）を均等に敷均し、ローラーで締固めを行い、その後現場で撹拌、混合された真砂土モルタルを打設し、表面をローラーで仕上げた。

施工面積は148.0㎡であった。

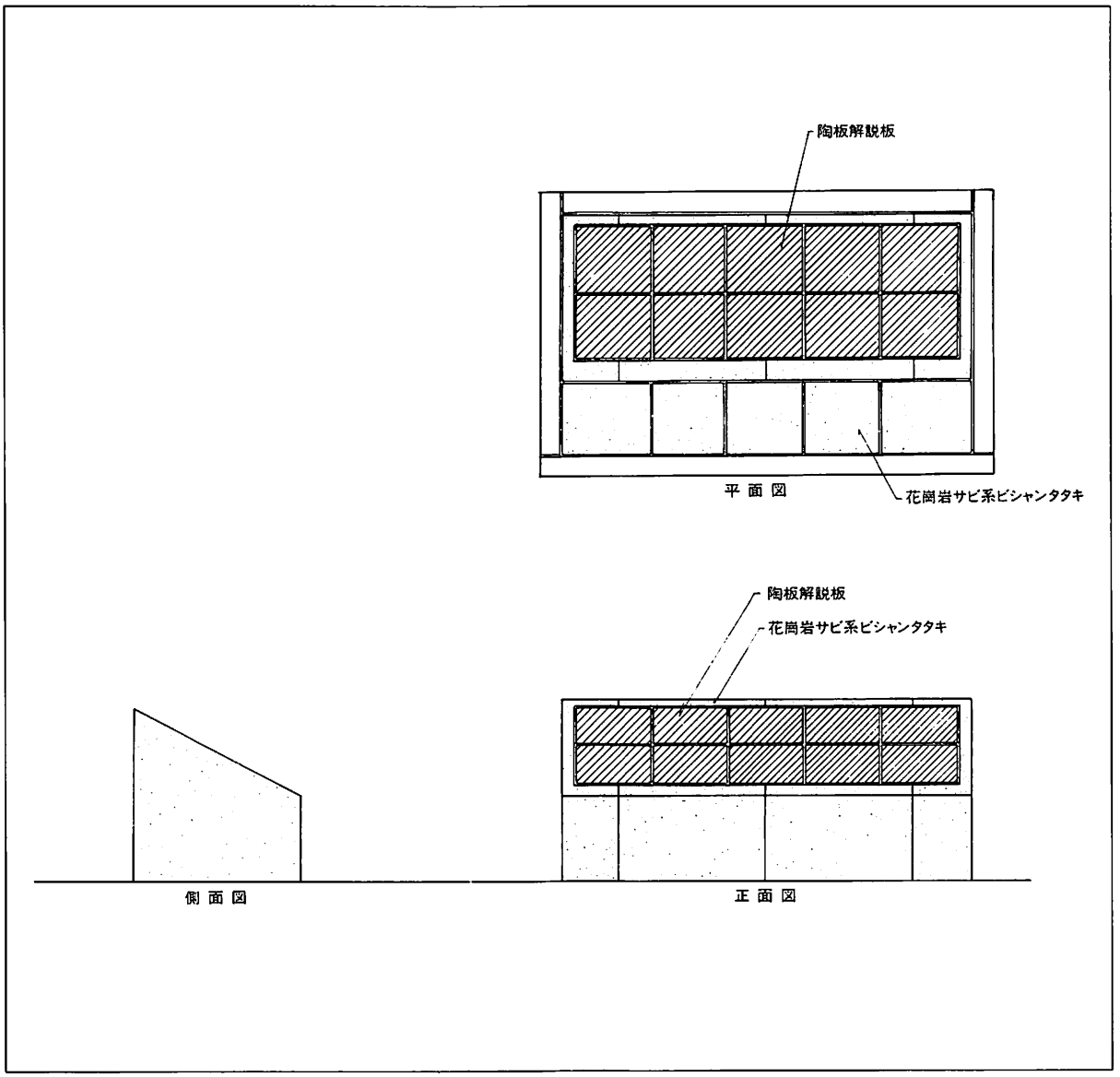
②学習施設工事

学習施設工事では解説板の設置を行った。

解説板の材料は本体を自然石（花崗岩サビ系御影石）、表示板を陶板とした。設置場所は覆屋内及び敷地の南西隅の入口部とした。

原稿は県教育委員会文化課と県立装飾古墳館で作成し、英文は熊本大学文学部甲元真之助教授に依頼した。

第12図　　解説板詳細図



〈入口部解説板表示内容〉

横山古墳

YOKOYAMA Keyhole-shaped Barrow

古墳の所在地

移転復原前の横山古墳は、鹿本郡植木町大字有泉字横山にありました。この場所は、植木町の東部にあたり、古墳は小丘陵の端に位置していたものです。現在、九州自動車道の敷地となっています。近くには、町指定の名勝「小野の泉水」があります。

古墳の時代

この古墳が造られた時代は、石室の構造や出土遺物から、古墳時代後期（６世紀後半）頃と考えられます。石屋形、左右両屍床のほか、通路等にも多量の人骨が埋葬されていましたので、この古墳がかなり長期間にわたって使用されたことがわかります。

移転復原の経過

横山古墳は、昭和43年、九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の際、植木町で発見されたものです。

昭和44年、県教育委員会では「横山古墳調査団」を組織し、発掘調査を実施しました。

調査終了後、古墳の石材は、将来、完全復原をするため保管してまいりました。

それから24年後の平成５年、この古墳は、肥後古代の森（鹿央地区）の一角に適所を得て、復原が実現したものです。

墳丘

墳丘は、調査時の計測では長さが39.5m、前方部の幅19m、高さが３ｍ、後円部の直径29m、高さ５ｍの小型の前方後円墳でした。

築造当時と比較して明らかに変形していると考えられる箇所については、今回の復原の際修正を加えました。

石室

石室は、後円部にあり、入り口は西に設けられています。入り口から長い羨道（通路）が続き、その奥に玄室が設けられています。玄室は、石灰岩や安山岩を積み上げて造られ、一辺が3.8mの隅丸のほぼ正方形をしています。

正面には石屋形が設けられ、中央の通路を挟んで左右に板石で仕切って造った屍床があり、石屋形前には灯明台のようなものも造り付けられています。

装飾文様

装飾は、石室の奥に設けられた石屋形の袖石等によく残っています。石屋形の右袖石には、上部に同心円文が、下部に双脚輪状文、周囲に三角文等が、赤・青・白の顔料を使って描かれています。また、左袖石には、連続三角文が同様の顔料を使い二列にわたって施され、上部には双脚輪状文が描かれています。

この他、屍床の仕切り石にも赤・青・白の顔料で三角文等が施されています。

出土遺物

発掘調査の結果、古墳の内外から多数の遺物が発見されました。古墳築造時の副葬品としては、多数の須恵器をはじめ、鉄製品（馬具・武具・鏃・刀子）、装身具（玉類）等、総数二百数十点が出土しています。

（英文）

YOKOYAMA Keyhole-shaped Barrow

The Yokoyama keyhole-shaped Barrow, located in Ueki, Kamoto County, has been reconstructed at the Higo-Kodai-no-Mori Park in 1993 after archaeological excavations conducted in 1969.

This barrow is small in scale as a keyhole-shaped barrow, having an overall length of about 40m. The interior of this tomb is a corridor-style stone chamber placed at the rear mound. This stone chamber consists of the prefabricated house-style stone coffin, the narrow passageway and the partialy damaged main burial chamber.

The decorated motifs such as circles, triangles and the peculiar geometoric designs may be seen at the prefabricated house-style stone coffin painted in red, white and blue. This barrow has produced many grave goods containing sue (unglazed ceramic) wares, glass beads, comma shapeds beads and iron implements such as arrow-heads, knifes and horse trappings.

The barrow is believed to have been constructed in the later half of the 6th century.

③安全施設工事

復原地内の一般車両進入防止のため敷地南西隅の入口部に車止め５基を設置した。但し、管理用車両の進入時には、取り外しができるように可動式の車止めとした。材質は、白色系の花崗岩御影石の円柱型（直径20～25cm、高さ40cm）とした。

④休養施設工事

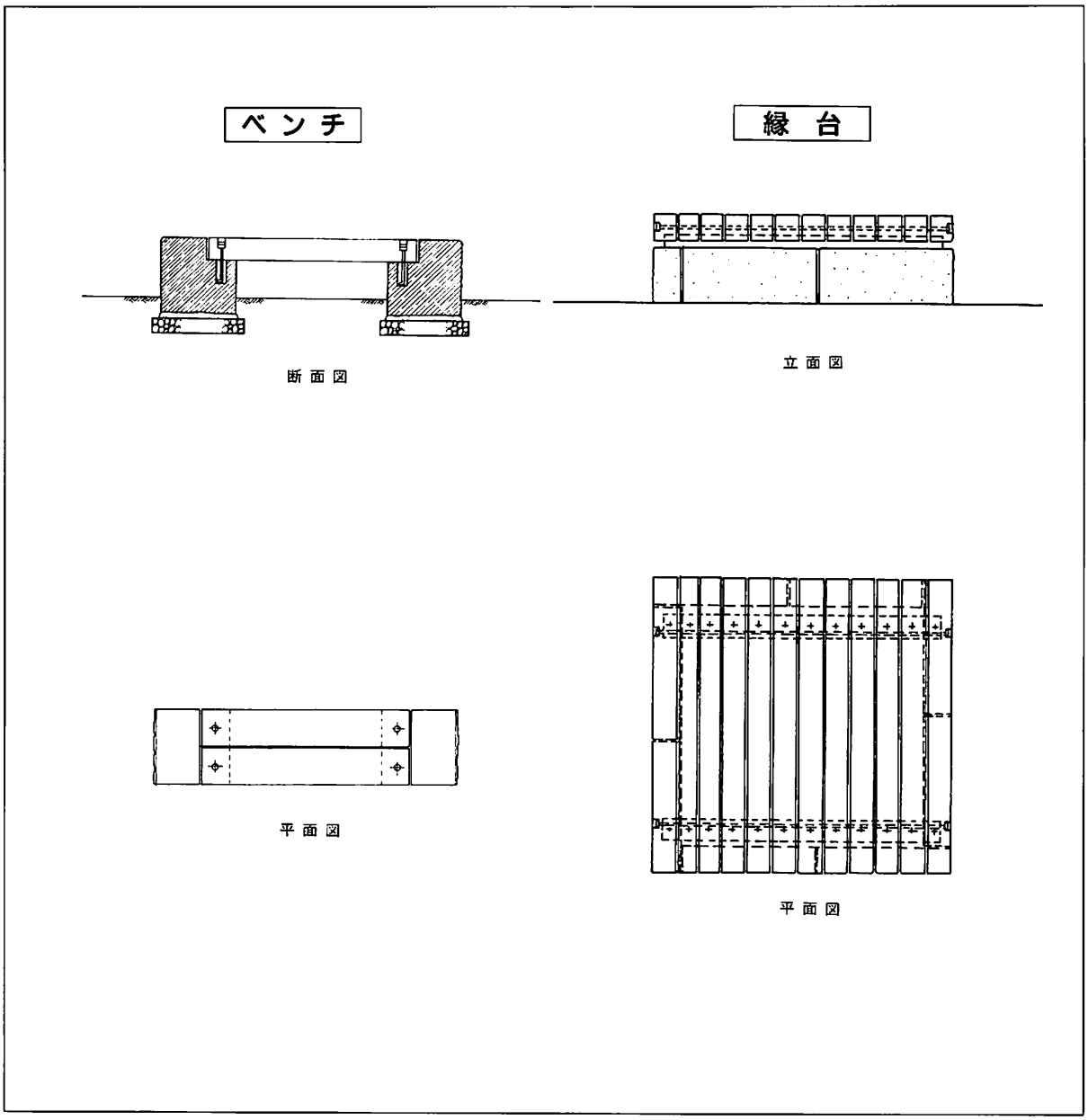
休養施設工事ではベンチ、縁台を設置した。

設置場所は、墳丘を見た場合、ベンチ等が景観的または視覚的に目立たない位置として、それぞれ現場で立会を行い、決定した。

ベンチは、台座を花崗岩サビ系御影石で、座席部分を木材（レッドウッド）とした。敷地南側に３基、敷地西側に３基設置した。

縁台は^{W}1.34m×^{D}1.34m×^{H}0.4mの規模で、土台部分はコンクリートで基礎を設け、側面には花崗岩サビ系御影石を固定し、天端部分は、木製（レッドウッド）で施工した。設置場所は敷地の北西部で、３基設置した。

第13・14図　　ベンチ・縁台詳細図



⑤雨水排水設備工事

敷地の地形は敷地の西北側から東南側へ緩やかに下っているため、表面上の雨水排水は、東側及び南側の側溝に流入するよう施工した。

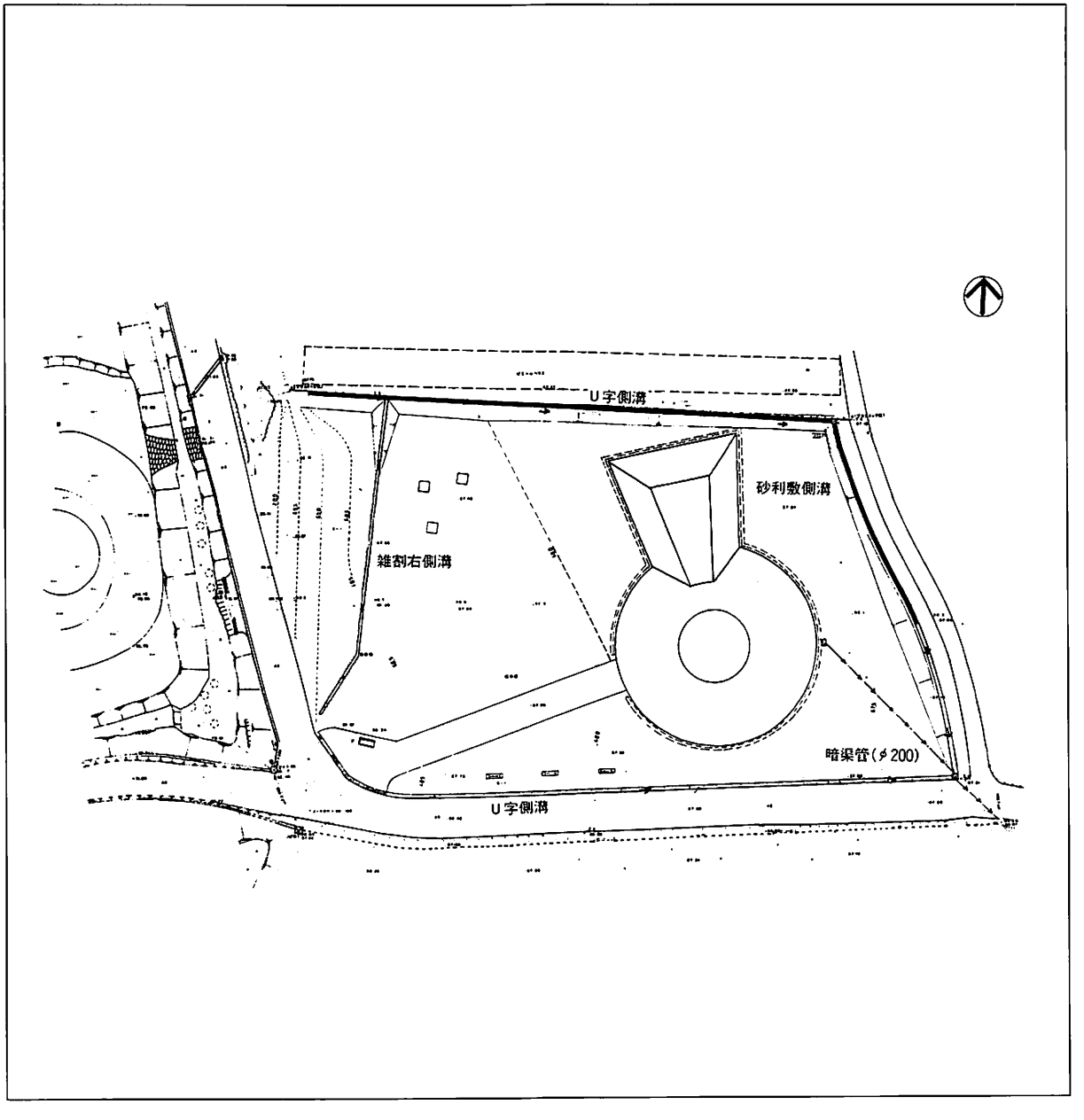
墳丘の表面排水は、墳丘周囲に上部を砂利敷きにして景観的に目立たないU型側溝を布設し、東南部の集水桝へ暗渠管にて接続した。

すべての流末は、東南部の集水桝とし、そこから南側に接する道路沿いの既設側溝に放流した。

施工量は以下のとおりである。

- U字側溝　194.0m
- 雑割石側溝　42.0m
- 砂利敷側溝　119.0m
- 集水桝　3　基
- 泥溜桝　1　基
- 暗渠管（φ200）　21.0m

第15図　排水平面図



⑥植栽工事

敷地全体の周囲を古墳の復原や見学空間にふさわしい空間とするため古墳築造当時の植生形態を目指し、照葉樹を中心とした植栽を行った。

使用樹種は、敷地周辺の樹種と同様樹種とし、その中でも修景的に良いクスノキ、アラカシ、ヤマモモ、アキニレ、エゴノキ、クヌギ、コナラ、ケヤキ、ヤブツバキを使用した。

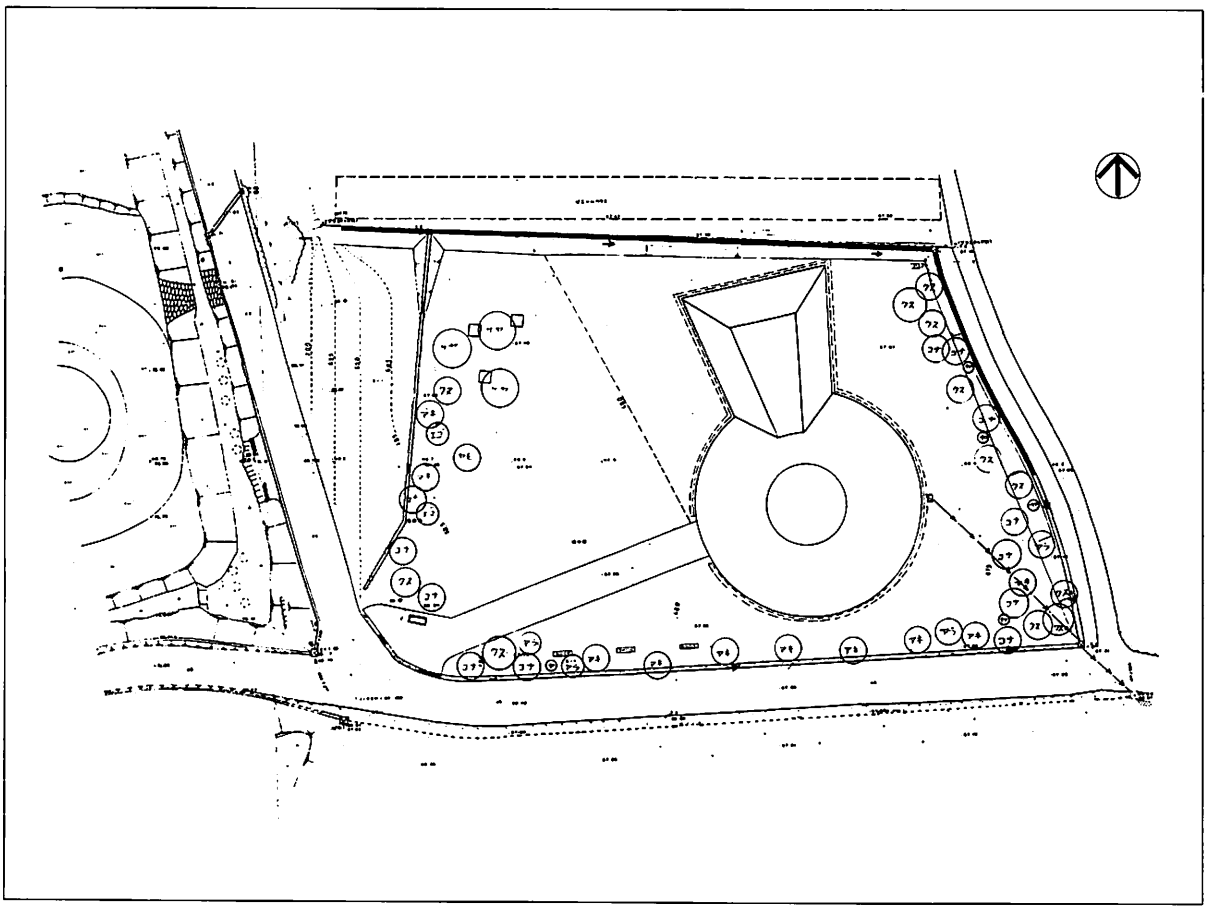
敷地境界部分の法面には、法面保護また境界明示も含めて低木を植栽した。

植栽樹種及び数量は以下のとおりである。

植栽数量表　　表５

工　種	記　号	名　　称	規　格			数量	単位	備　考
			H	C	W			
高木	クス	クスノキ	4.0	0.45	1.5	3	本	３本支柱Ｂ
	クス	〃	3.0	0.2	0.9	4	〃	２脚鳥居支柱
	アラ	アラカシ	3.5	0.25	3本以上	4	〃	３本支柱Ａ
	ヤモ	ヤマモモ	3.0	0.2	0.8	1	〃	２脚鳥居支柱
	アキ	アキニレ	4.5	0.25	1.8	10	〃	〃
	エゴ	エゴノキ	3.5	0.2	3本以上	2	〃	３本支柱Ａ
	クヌ	クヌギ	4.0	0.2	1.5	5	〃	２脚鳥居支柱
	コナ	コナラ	3.5	0.2	3本以上	12	〃	３本支柱Ａ
	ケヤ	ケヤキ	5.0	0.3	2.5	3	〃	３本支柱Ｂ
中木	ヤ	ヤブツバキ	1.8	——	0.5	5	〃	１本斜支柱

第16図　　植栽平面図



総括

近年のわが国における道路や住宅開発等に伴う埋蔵文化財の発掘件数は日毎増加し、記録保存という名のもとに失われていく貴重な文化財も少なくない。

横山古墳も九州自動車道の建設に伴い発掘調査が行われ、墳丘は失われたものの、その記録とそしてなによりも石室の石材は今日まで大切に保存されてきた。

本事業をふりかえると横山古墳はいくつかの好条件に恵まれていたといえる。

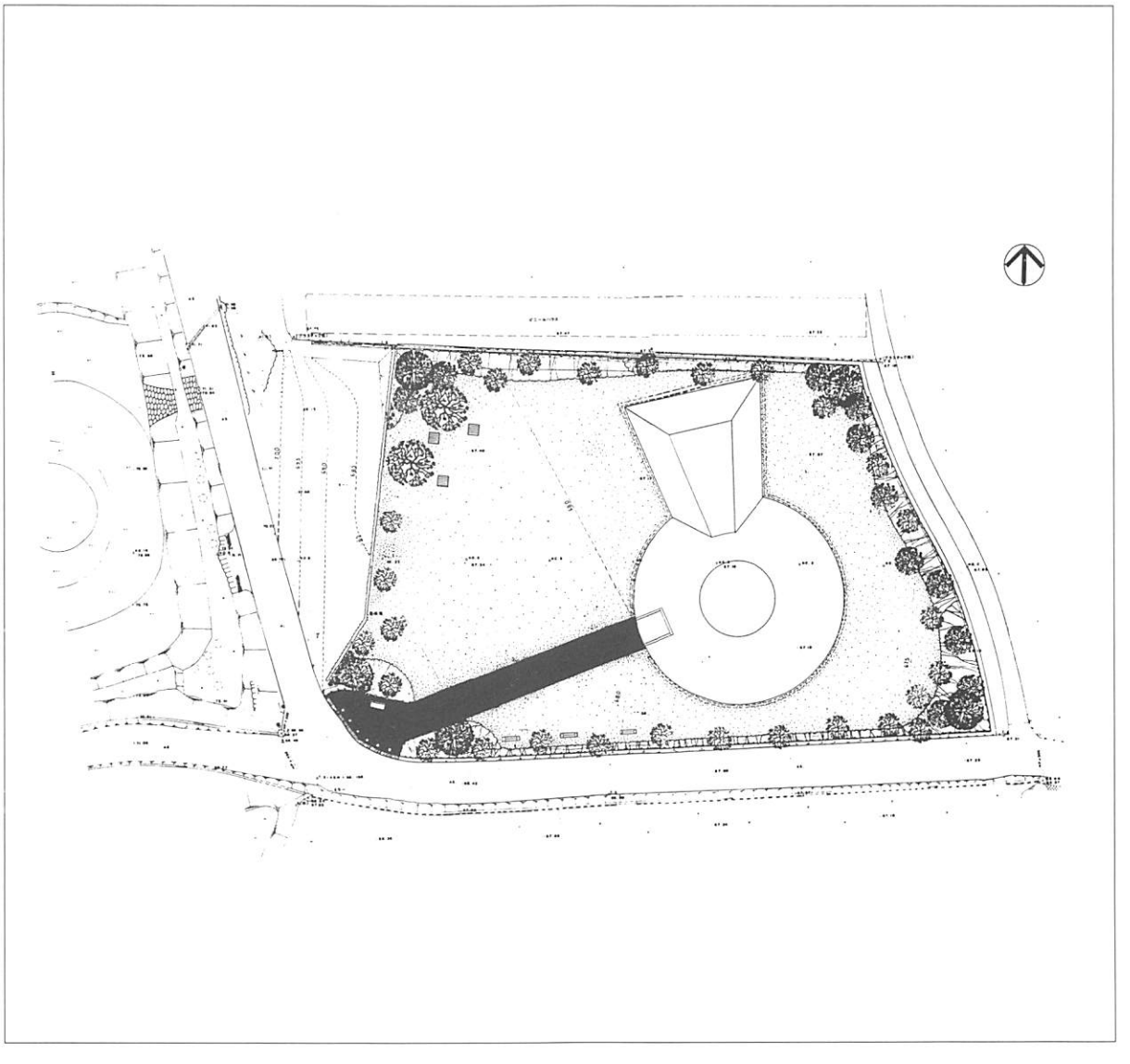
発掘調査から20年以上経過したもののその石室石材が散逸することなく、良好な状況で保存されていたこと、そして本県が文化財の保存と普及活用を図るため、肥後古代の森の整備事業を進めていたことである。

以上のような好条件があってはじめて、横山古墳のもつ本来の価値を顕在化することができたのではないかと思われる。

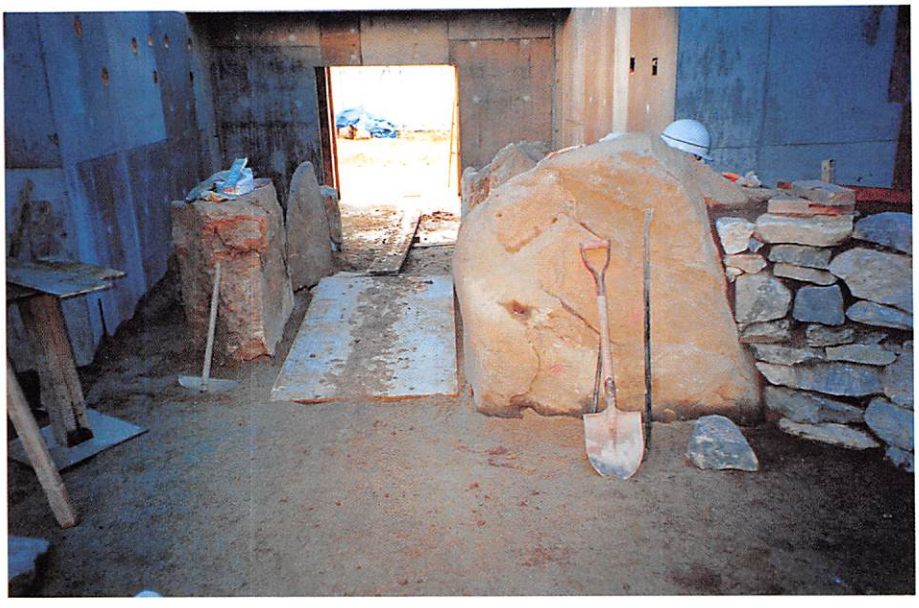
まさに眠っていた貴重な文化財が現代に蘇ったといっても過言ではない。

肥後古代の森（鹿央地区）には、県を代表する文化施設である装飾古墳館があり、既に多くの見学者が訪れているが、横山古墳が野外での生きた博物館として今後とも活用されていくことを期待している。

第17図　横山古墳整備平面図



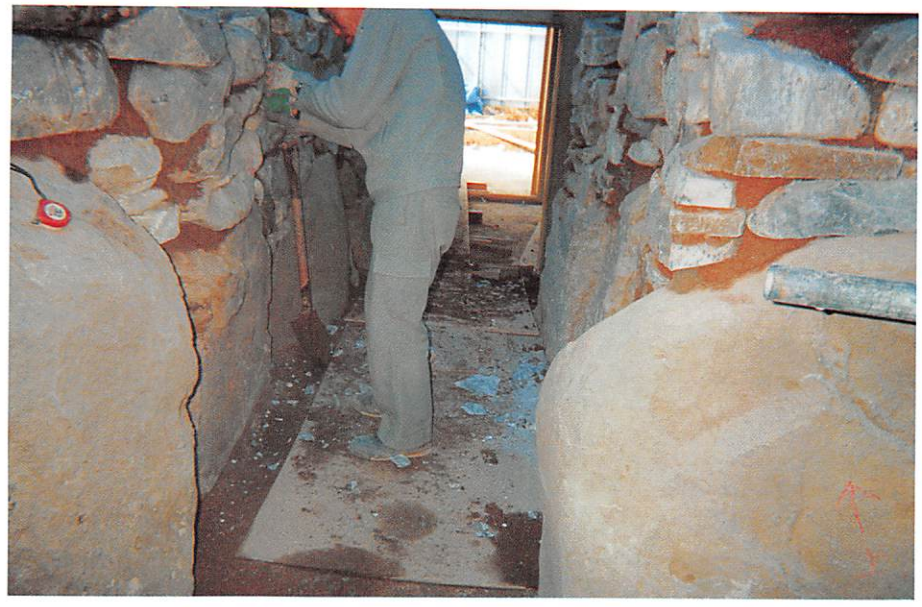
写 真 図 版



1　石室復原工事状況

2　石室復原工事状況
（裏込は真砂土モルタル）

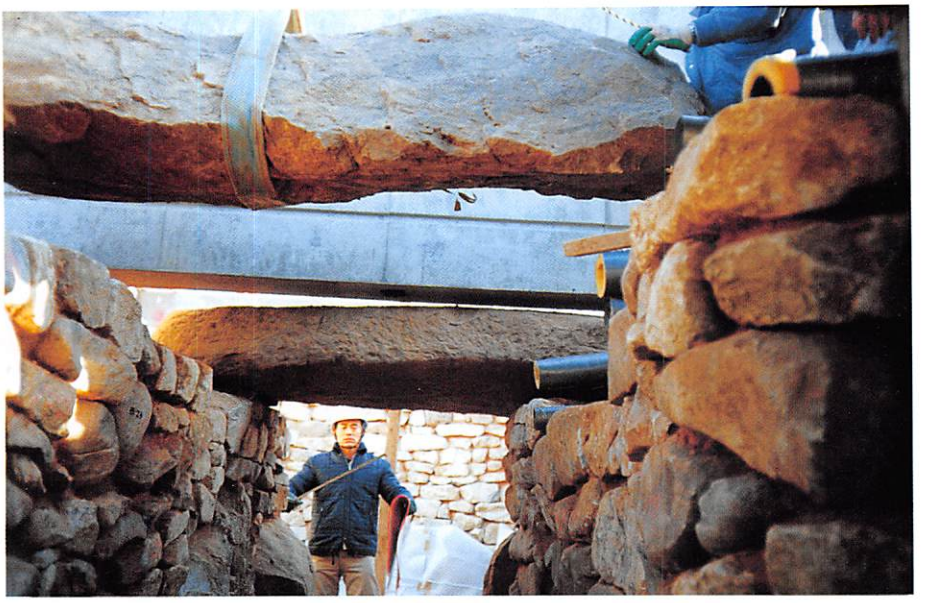
3　２m以上積み上がった石室状況



4　復原図を見ながら石材を修正状況

5　巨石はクレーンで上部から搬入状況

6　羨道部天井石を据え付け状況

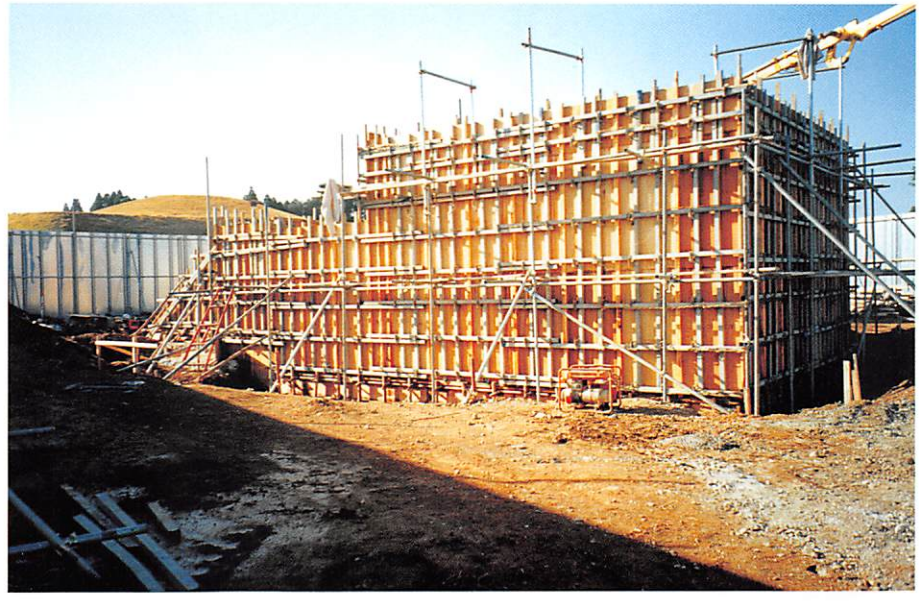


7　羨道部天井石を据え付け状況

8　解体石材の清掃

9　浸漬法での強化剤含浸

10　スプレー法での強化剤含浸



11　覆屋型枠作業完了

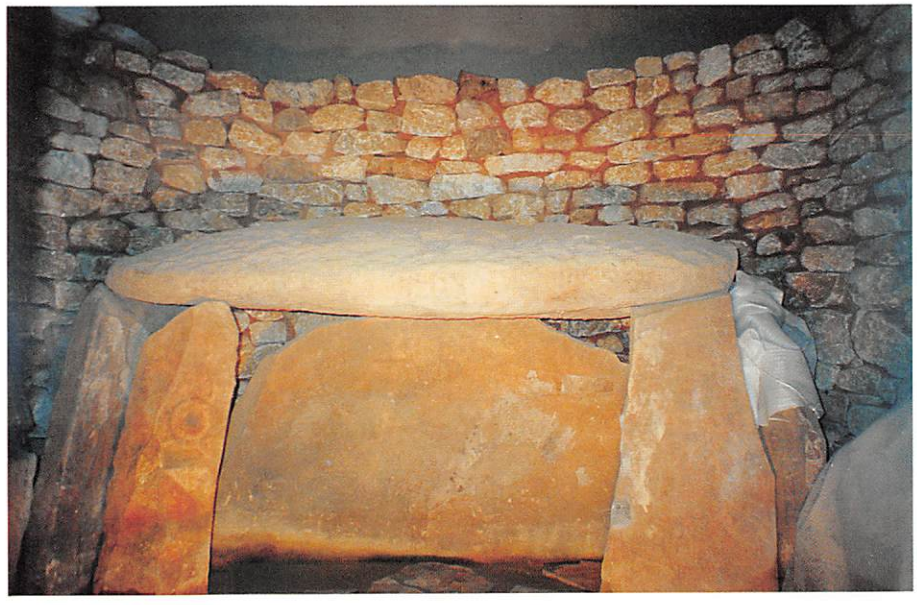
12　覆屋躯体全景

13　覆屋天井PC　コンクリート据付

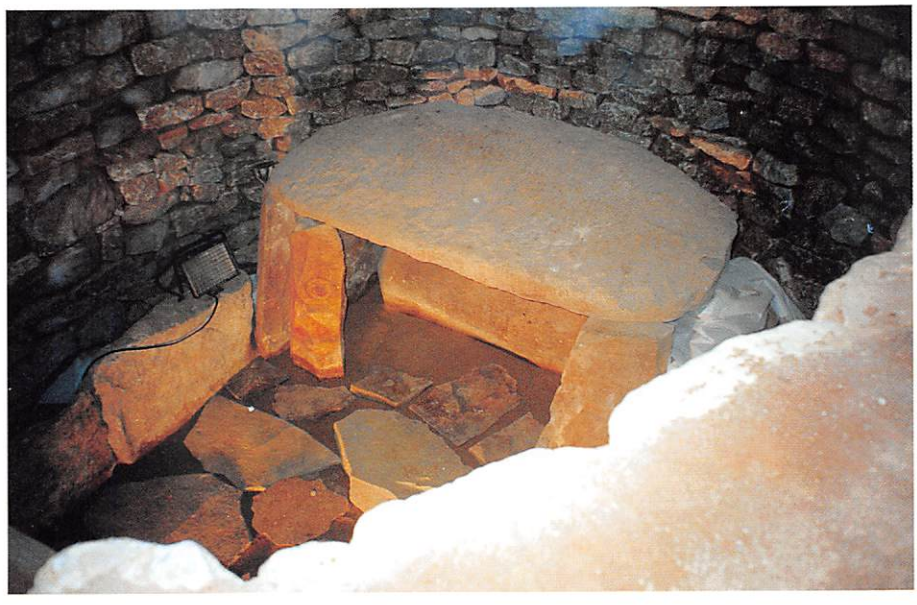
14　覆屋外部防水工事

15　真砂土モルタル施工状況

16　真砂土モルタル施工状況



17　復原された石屋形



18　復原された石屋形

19　墳丘盛土開始

20　墳丘盛土状況

21　墳丘の形態完了

熊本県文化財整備報告第２集

横　山　古　墳

平成６年３月31日

編集発行　熊本県教育委員会
〒862
熊本市水前寺６丁目18番１号

印　　刷　株式会社　城野印刷所
〒861-22
熊本県上益城郡益城町広崎1630番１号
（産業団地内）

05 教委 教文
⑥ 012

この電子書籍は、熊本県文化財整備報告 第 2 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：横山古墳
発行：熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地
電話：0968-36-2151
URL：http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日